

オフホワイトメガタワー

## ■登場人物

好きにいじってください

## ■本編

ぼんやりと暗い洞窟のようなところ。

水のしたたる音になっている。

女の死体。顔が血だらけ。

Jが自分をナイフで刺しながら立っている

J「優しく声をかけてくれた。いつも味方になってくれた。大丈夫だよと、手を握ってくれた。息を引き取る、その瞬間まで」

頭に布を被った覆面たちがぞろぞろと出てくる

J「愛していた。僕はただ愛していた。愛し合っていると思っていた」

覆面1「だが、君が」

覆面2「君が」

覆面3「君が」

覆面4「君が」

群読「君が殺した」

覆面2「なぜ殺した」

覆面4「殺す理由はなかった」

覆面1「いや、理由はあった」

覆面3「殺さなければならなかった」

J「僕が殺したのは」

覆面1「君が殺したのは」

群読「自分自身だったのかもしれない」

暗転

映像テロップ

「このシーンは本編とは一切関係ありません。  
次回作「Jのハンニバル」の1シーンです。

それでは、本編をお楽しみください」

## 第一章 「医療アベンジャーズ～日本よ、これが医療だ～」

明転すると輝がうろうろしている

輝「うーん……こんな田舎の辺鄙な海沿いにある館に、本当にあの有名な先生が住んでいるんだろうか……。まあ考えてても仕方ない！　ここは勇気を出してっと。先生！　ブラックジャック先生～！！」

新喜劇のように登場曲に合わせてBJが登場する。

BJ「んん？　誰だい？　君は」

輝「は、初めまして！　大安田病院から来ました、大真東輝です！」

BJ「大安田病院、といえば大安田さんが作った神レベルの医師が集まる通称ヴァルハラ……。そうか、君がああ噂に名高いゴッドハンド輝か」

輝「そんな、天才外科医であるブラックジャック先生の前でゴッドハンドなんておこがましいですよ！」

BJ「私は医師免許もないモグリの医者だよ。それで、何か用かな？」

輝「実は、大安田院長から言伝がありまして……」

BJ「このご時世に、わざわざ直接？　何かよっぽどの事情があるのかね」

輝「いえ、その、ブラックジャック先生と会えるチャンスなので、つい、来てしまいました……。すみません！」

BJ「嬉しいことを言ってくれるね。そうだ、ミキプルーンがあるんだが、一杯どうだい」

輝「いえ！　大丈夫です！」

BJ「そうか、残念だ」

輝「あのお、失礼ですがブラックジャック先生はおいくつですか？」

BJ「今年で50だが？」

輝「ええ！？　若っ！　若すぎないですか！　まさか、自分自身に美容手術を！？　ブラックジャック先生といえば、有名ですもんね！　自分に手術するやつ！　鏡使って！　コヨーテとか襲ってくる中！」

BJ「違う違う。若さを取り戻すのに必要なのは、禍々しい人を斬るためのメスなんて必要ないのさ」

輝「何が必要なんですか？」

BJ「答えは一つ。オーガニック食品があればいい」

輝「お、オーガニック食品！？」

BJ「ブラックジャック印のきび団子を一日一個食べていたら、充実した日々を送ることができる。なんでもメスで切れればいいというのは、傲慢だよ」

輝「勉強になります！」

BJ「簡単に作れるぞ。レシピを教えておこう」

輝「いいんですか!？」

BJ「まず、ミキプルーンをぎゅっと固めて、上からきびの粉を2粒ほど振りかけたらそれで完成だ」

輝「それミキプルーンじゃないですか！」

BJ「今立て込んでいてね。言伝を早く伝えて欲しいのだが」

輝「すみません！ 立て込んでらっしゃいましたか……」

BJ「……これを見てくださいかね」

輝「ややや!？」

映像に、臓物などが映し出される

輝「なんですかこの謎の培養液にどっぷりつかった臓物たちは！」

BJ「これは……」

輝「貴様……手を出したのか！ 不老不死の人体実験に！ 許さん！ 唸れゴッドハンド！」

BJ「とある女性が奇形腫の切除にやってきてね。奇形種の中にあったものだ。本来、その女性は双子として生まれてくるはずだったのだが……このような形になってしまったのさ」

輝「なるほどお。理解しました。培養液に入れているという事は、まだ生きている、ということですか」

BJ「さあね。だが奇形種の中は子宮の中と同じ羊水に満たされていた。ぺろって舐めたからね。わかるんだ。……私なら、これを一つにすることができるのではないか。なんて思っただけ」

輝「……やってみましょう。先生」

BJ「ゴッドハンド君……」

輝「輝とお呼びください！ 自分は、今まで一人として患者の死に立ち会ったことはありません！！」

BJ「噂は本当だったんだな。患者を死なせない奇跡の医師、ゴッドハンド輝……。ブラックジャック印の人工ボディ、人工アナル、全ては準備してある。だが、これはもはや人造人間製作だ。人間風情が取り掛かっていい所業ではないかもしれない……」

輝「言うでしょ？ 男は度胸、お医者とはとにかく試して合点、政治家だらけの大運動会って」

BJ「よし、やってみよう」

オペが始まる。幕が吊られシルエットだけが浮かび上がる。  
宿屋に泊った音が流れる

輝「やりましたね！ ブラックジャック先生！」

BJ「君が助手をしてくれたおかげだ！ 奇跡だよ！ ほら、何を恥ずかしがってるんだ。出てきなさい。ピノコ！」

ピノコがムスっとした顔で登場する

輝「ピノコちゃんかあ、いい名前だ」

ピノコ「おいこら、腐れブラックジャック」

BJ「腐れだと？ 父同然の私に向かって！」

ピノコ「何が父なのよさ！ あんた、なんで私を四十路で作ったのよさ！

輝「えええ?!」

BJ「いいか、ピノコ。お前の体は私が作った人工アナルを中心に内臓や脳以外は人工物なんだ。つまり、身体は成長していかない。18歳で作ればずっと18歳だ。それはお前、具合が悪いだろう」

ピノコ「若い方がいいに決まってるのよさ！」

BJ「バカ者！ ずっと若いとか、化け物扱いされるぞ！ 40歳だけど、そこそこ見た目は若く作ってる。ロリババアとして生きて行くのが一番いいんだ。お前にもいつかわかる！ なあ！ 輝君！」

輝「先生、そんな事よりも問題が」

ピノコ「貴様！ そんな事とは何かね！ 株価が下がってもいいから、日産の車でひき殺した後に三菱の車で……」

輝「これを見てください」

ざるの中には、臓物が大量に余っている

BJ「なんと！ これは一体!？」

輝「臓物がこんなに余ったんです……」

ピノコ「こっわ！ ほとんど余ってるのよさ！ 私の中身どうなってるのよさ！」

BJ「ううん。これは困ったな。……よし、どうせ余ってるんだし、もう一人作ってみよう！」

オペが始まる。幕が吊られシルエットだけが浮かび上がる。  
大工の仕事みたいな音が聞こえる

輝「まさかまさかでしたね」

BJ「そうだな。まさかこうなるとはな。さあ、出てきたまえ」

パノコピノコプノコが登場する

BJ「まさか、三体もできてしまうとは」

パノコ「パノコ、30歳。桃とイチゴが主食。だめ、お星さまがこっちを見てる」

ピノコ「こわっ！ とんだ腐れ電波なのよさ」

プノコ「プノコ、50歳。まだまだ人生はこれからだと思ってます」

BJ「見てみるピノコ。プノコみたいなこの余裕が必要なんだ」

ピノコ「五十路っていうか、墓場前って感じなのよさ」

輝「あ、そうだ。先生、これ大安田院長からの手紙です」

BJ「ああ、すっかり忘れていたよ。……なんだって?!」

暗転

映像「オフホワイトメガタワー」

明転するとコトーが海を眺めている

海之音

コトー「自分の力の無さが憎いよ。大星野さん……」

そこに大大山倍達が空手着でやってくる

マス「コトー先生。ここにいたんですか」

コトー「診療所以外全て、汚物は消毒だと叫びながら焼き尽くされたこの島で、変わらないのはこの海だけですから」

ドクターXYZが登場する

X「天才的な技術を持ちながら、大学病院を飛び出して医者がいなくなった孤島にやってきた孤島キチガイ。ドクターコトーこと大五島健助、久しぶりね」

コトー「ドクターXYZ……大大門先生。お久しぶりです。孤島キチガイだなんてひどいな。大学病院を飛び出したのは……医療ミスの責任を取るためです」

X「結局、その医療ミスはあなたの責任じゃなかった。周知の事実よ」

コトー「それでも、疲れたんです。大学病院の闇にね。いいですよ。島は。医者ではなく、人間として生きていける」

X「あなたに興味ないの。黙って。あのメール、本当なの？」

コトー「……はい」

X「そう。……COVID-19 がやっと収束を迎えたと思ったのに」

コトー「あなたの他に、大安田先生を呼んでいます」

X「黄金の左手、ヴァルハラの大安田先生。彼なら心強いわね」

ブラックジャックが登場する

BJ「悪いが、彼は来ないよ」

X「孤島キチガイ。話が違うじゃない……黄金の左手どころか、モグリの無免許医？」

BJ「特定の病院やしがらみに属さないフリーランスの凄腕外科医、ドクターXYZ、君は相変わらずだな」

X「喋らないでモグリキチガイ」

コトー「なぜ、君が？」

BJ「大安田さんから頼まれてね。彼は今動くことができないそうだ」

コトー「そうか……」

BJ「私の他に、大里見先生も呼ばれているはずだ」

X「大里見……彼、大丈夫なの？」

コトー「友人の死を受け入れられず、霧がかった山奥で廃人になっていると聞いたが」

BJ「あの白い巨塔を生き延びた男だ。間違いなく、彼は立ち上がる。また自分の足でね」

X「ふうん。ところで、さっきから気になってるんだけど、その空手着の人は？」

コトー「ああ、紹介が遅れました。彼こそが奇跡の男。ゴッドハンドです」

マス「どうも。ご紹介にあずかりました。ゴッドハンド、大大山倍達です。マス大山と呼んでください」

BJ「ちょっといいか。ゴッドハンドは大真東輝君だと思うが」

コトー「……なぬ？」

X「そうよねえ。この人、どう見ても空手家よねえ」

マス「はい。極真空手からやってきました」

コトー「まさか、医者じゃない？」

マス「空手家です」

コトー「なんてことだ！ あなた、ヴァルハラのごッドハンドかって聞いたら頷いたじゃないですか！ 一緒にウイルスと戦おうって言ったらうんって！」

マス「ヴァルハラが意味わからなくて。とりあえず頷きました。戦うのは、空手でかなって思って、頷きました。押して忍ぶ、それが押忍の精神！ 押忍！」

X「名前も全然違うじゃない」

コトー「名前は知らなかったんですよ。ゴッドハンドってことだけ……」

マス「一応、ゴッドハンドって呼ばれてるんですが……とんだゴッドハンド違いだったようですね。はっはっは」

BJ「本物のゴッドハンドは大里見先生を探しているはずだ」

X「まあいいわ。とりあえず、患者は？」

コトー「……ただ一人、生き残った患者は僕の診療所にいます」

マス「こっちはです！ 急いで！」

診療所内に入るとすごい温度と湿度

Jがベッドで寝ている

X「暑い！」

BJ「それに、ものすごい湿度だ」

コトー「彼が、唯一の生存者。城之内君です」

X「COVID-19、新型コロナウイルスが変容して生まれた、新たなウイルス……」

BJ「見たところ、安定してるようだが」

コトー「WJ-1と名付けました」

X「どういった症状なの？」

コトー「見ればわかりますよ」

J「やや、先生。初めましての人もいるようだ」

Jが立ち上がる

コトー「無理はいけないよ」

J「今日はすこぶる調子がいいんです！ ほら見てください！」

JがNARUTO走りをする

X「元気そうね」

BJ「いや、待て……これは？ なるほど。WJ……」

コトー「気づきましたか」

X「なんなの？」

BJ「この走り方、ピンとこないか？」

X「この子、はしゃいでるな。としか思わないわ」

BJ「この世で一番売れた忍者漫画と言っても過言ではない、NARUTOの走り方、通称NARUTO走りだよ」

X「NARUTO走り？」

J「いやあ、本当に先生、クソお世話になりました！」

土下座する J

X「何？」

BJ「累計5億部近く売れている漫画、ワンピースの登場人物サンジの土下座……。これは、悪ふざけではないんだろう？」

コトー「はい」

J「一体いつから、俺が病気だと錯覚していた？」

X「なんだっていうの！」

BJ「ブリーチの愛染か……！」

コトー「彼は、WJ-1、新型コロナウイルスから生まれた新たなウイルス、ウィークリージャンプウイルスに感染しているんです」

BJ「感染したら、ウィークリージャンプ、つまり少年ジャンプの漫画になぞらえた言動をしてしまう……ということか」

X「冗談はやめなさい。そんな馬鹿な話があるわけないでしょう」

コトー「これを見てください」

映像、コロナウイルスの中にジャンプのマークが混じっている

X「冗談でしょう!？」

コトー「冗談じゃないんですよ。異変が起きたのは7日前のことです。コロナウイルスに効果があるけど厚生省で認可されていないワクチンが届いたので、こっそり島の住民と、旅行者にぶちこんでいたんです。それで新型コロナは一旦落ち着いた。かのように見えた」

BJ「そのワクチンが、ウイルスの変容を生んでしまったのか？」

コトー「いえ。一人、ワクチン接種を嫌がった人がいたんです。その人を説得しようと夜道を歩いていたら……すれ違ったんです。NARUTO 走りをしている、彼とね」

X「もう既に、ウイルスは変化していた……」

コトー「そこからは全てが一瞬でした。W J 1の感染力は新型コロナの非じゃない」

BJ「致死率は」

コトー「100%」

X「100……!？」

コトー「薬も効き目がありません。最後は、みんな……悟空ー！ と叫びながら……」

BJ「ボン！ か……恐ろしい病気だ」

X「わかんないのよ。全然。マンガ読まないから」

コトー「今のところ飛沫感染が主だとは思いますが……詳しくはまだわかりません。ただ一



つ言えることは、ここでどうにか食い止めないことには世界は滅びてしまう」  
BJ「発症から、どのくらいで？」  
コトー「人によってまちまちですが……概ね3日でボン！ ですね」  
X「彼は？」  
コトー「1週間」  
X「彼だけ、特別？」  
BJ「彼がウイルスに対する抗体を持っているのか……色々な可能性はあるが、調べてみないことにはわからんな」  
J「先生、俺、死ぬんですか？」  
BJ「死なせないさ」  
J「一瞬…!! だけど… 閃光のように…!!! まぶしく燃えて生き抜いてやる!!!」  
X「一瞬で死なれたら困るの」  
BJ「これも少年ジャンプだ。ダイの大冒険……。反応していたら身が持たないぞ」  
X「私、漫画読まないから全然わかんないのよ！」  
コトー「この島の人間はほとんどが、ボン！ となりました」  
X「ほとんど？」  
コトー「何人か、海賊王に俺はなると言いながら海に飛び込んだ、という情報が」  
BJ「感染者だ。まずいな」  
マス「とにもかくにも、彼を調べて、世界を救わねば。急ごう！」  
X「とりあえず、切ってみる？」  
BJ「XYZ、君はとにかくすぐ切るな」  
X「私、失敗しないので」  
BJ「……オペの開始だ」

オペが開始する中、輝がピノコたちを連れて山の中を歩いている

輝「本当にいるのかな……こんな山奥に」  
パノコ「あっちのほうから、禍々しい波動を感じます。パノコ、怖い」  
ピノコ「怖いのはこっちなのよさ、腐れ電波！」  
輝「まあまあ、行ってみよう！」  
全員「うわあああああああああああああ！」

走り出すと後ろから大里見が追ってくる

里見「あああああああああ！」  
全員「ぎゃあああああああああ！」

輝「あ、あなたは！？ その風防、目の濁り方、間違いない。あなたが日本一のマンモス大学病院、通称白い巨塔に所属していた天才内科医、大里見先生ですね！」

里見「確かに、そう呼ばれていた時代もあった、かもしれない」

輝「親友だった、同じく白い巨塔の天才外科医大財前教授の死を受け入れられず、こんな山奥で隠遁生活を送っているというのは本当だったんですね」

里見「私は、大里見ではない。今の私は、白い巨塔の天才内科医大里見改め、殺人医師ドクタージャッカルこと大赤屍蔵人だ」

輝「なんだって?!」

プノコ「大赤屍さん、よろしくお願ひします。プノコと申します」

輝「しっぽり自己紹介してんじゃないよ！ ドクタージャッカルって言ったら、人を殺すことを愉しむ殺人嗜好者、犠牲者の体に、『じゃっかる』って草書体の文字を切り刻むことで有名なあのドクタージャッカル?!」

里見「大里見改め、ね」

輝「改めすぎですよ！ 何やってんの！」

ピノコ「とにかく大里見の力が必用なのよさ！」

里見「だから言ってるだろう。今の私は、ドクタージャッカルだ」

手をかざすと、ピノコの尻が 256 個に割れる

ピノコ「いたいいたいいたいいたい！」

プノコ「あらあ、お尻の割れ目が 256 個に増えてます」

パノコ「素敵……」

輝「オロナインでも塗ってろ！ 実は、超危険なウイルスが発見されたんです！」

里見「無理だ。私はもはや、ただの快樂殺人者ドクタージャッカル」

輝「それが、大財前教授が求めたことか！」

里見「確かに！！」

輝「死を悼むのはきっと故人も喜んでくれることでしょう。だが、あなたがそんな風に改まることを、大財前教授は求めてはいない！」

里見「しかし、今更……もうどうにもならない……もう一度自分をリライトしたら、もう何もかも粉々になって自我を失ってしまうかもしれない……」

ピノコ「何言ってるのよさ！ リライトなんてバンバンしたらいいのよさ！」

リライトが流れてピノコが歌う

K「リライトしたよ。私は、大里見改め、大赤屍蔵人改め、大西城カズヤ。野獣の肉体に天才の頭脳、そして神技(しんぎ)のメスを持つ男、スーパードクターK こと大西城カズヤだ！」

輝「ああもう、なんだっていいです！ とりあえず行きましょう！」

K「大財前、もう一度、僕は人を救うよ……」

全員が走り出すと、離島のメンバーが押し出される。

輝「ってわけで、連れてきました！」

コトー「あなたが白い巨塔の大里見先生ですか！」

k「いや、私は大里見改め、ドクタージャッカル」

BJ「なんだと!？」

X「ドクタージャッカルって、あの!？」

コトー「くそ、輝君、そこの三人娘、逃げなさい！ 彼は我々が食い止める！」

k「そして、ドクタージャッカル改め、野獣の肉体に天才の頭脳、そして神技(しんぎ)のメスを持つ男、スーパードクターK こと大西城カズヤだ。どうぞよろしく」

BJ「君があのだ！ 噂は聞いてるよ。ドクターK」

二人が熱い握手を交わす。

X「ドクターKなら、大里見先生の穴も十分に埋められるわね」

コトー「いや、それ以上ですよ。棚ぼただ！」

k「それで、現状は？」

BJ「正直、お手上げだ」

マス「とにかくオペ室へ。案内します。こっちです！ さあ急いで！」

退場していく。

夜になる。

b j とピノコたちが残っている

BJ「w j 1……暗中模索とはこのことだな。こんなウイルスは初めてだ」

ピノコが四葉のクローバーを探している

ピノコ「全く……四葉のクローバーが全く見つからないのよさ」

BJ「ピノコ。この島は火炎放射器で焼き払われているんだ。四葉のクローバーが見つかるはずないだろう」

ピノコ「きっと四葉のクローバーさえあれば、患者さんも良くなるはずなのよさ」

BJ「だから、ないって！」

パノコ「先生……お星さまが、こっちを見てます」  
BJ「パノコ……お前、むずいんだよ。なんだよ。お星さまがどうって」  
プノコ「ほらほら、パノコちゃん。お薬の時間ですよ」  
BJ「プノコもさあ……お前何歳設定なんだよ」  
プノコ「50歳設定で、先生がお創りになったじゃありませんか」  
BJ「それもう戦前生まれのババアなんだよ！ 設定守れよ！」  
ピノコ「四葉のクローバーないのよさ！」  
BJ「だからないって言ってんだろ！」  
パノコ「喧嘩しないで！」  
BJ「ば、パノコ……」  
パノコ「お星さまが見てる！」  
BJ「ああ！ なんなんだよお前ら！ お前らなんか、作るんじゃないよ！」  
ピノコ「四葉の……」  
BJ「特にお前だよ！ 人の話聞かねえなあ！ ああもう！ 寝る！」

BJが退場する。  
寄り添って泣くPの一族  
そこにkがやってくる

k「どうしたんだい。こんな夜更けに」  
ピノコ「危ないおっさん……先生にお前達なんかいないって言われたのよさ」  
k「そうか……君たちはブラックジャック先生と家族になれたんだよ」  
ピノコ「え？」  
k「そんな、素の姿を見せるのは君達だけだろう。私たちの前じゃ、彼はクールな男だからね。君たちの前では本音が言える。つまり、君達は家族になったんだ。ただ、本音で君達を作らなかったらよかった。そう言ってるだけさ。でも、家族だからね。素晴らしいことじゃないか」

Pの一族が腑に落ちない顔をしている

k「よかった。腑に落ちたみたいだね」  
ピノコ「目が節穴すぎるのよさ」  
k「さ、帰ろう。きっと彼は今頃、一人用のテントで一人分の暖かいスープを飲みながら君たちのことを一切待とうとせず寝るはずだ」

一同退場する

輝と XYZ が登場する

X「まさか、あなたがあの飛行機事故の生き残りだったとはね」

輝「はい。僕の父は、ゴッドハンドと呼ばれた天才医師でした。それがあの飛行機事故で…  
…プロペラに巻き込まれて右手だけのマドハンドみたいになってしまったのに……心停止  
した僕にずっと心臓マッサージをしてくれたんです。これは、その痕です」

輝の胸にはマドハンドの絵が描かれてある

X「信じるわ」

輝「え！？ この話、誰も信じてくれなかったのに……なんで」

X「私ね、男の話は信じるって決めてるの。女の話は信じない」

輝「なんでですか？」

X「女は嘘をつくから。あなたも気をつけなさい。女は笑いながら嘘をつき、泣きながら嘘  
をつく。嘘の股から生まれた存在が女。女の言葉は全てがあべこべ」

輝「ってことは、本当は僕のこと信じてないってことですか?!」

X「なんでよ。だから男の話は信じるってば」

輝「でも女の話は信じないんでしょう？」

X「女は嘘をつくもの」

輝「じゃあ、信じてるってのも嘘じゃないか！」

X「だから……男の話は信じるのよ！」

輝「女の話は？」

X「信じるわけないでしょう！ 嘘をつくんだから！」

輝「じゃあ僕の話も信じてないでしょうが！」

X「ああもう！ らちが明かないわ！ おもてなししてくる！」

輝「おもてなし？」

X「うんこのことよ！ 鈍いわね！ 女にこんなこと言わせるんじゃないわよ！」

X が退場する

輝「なんだ！ あの女！ クソが！ 正真正銘のクソだ！ クソがクソこいてら！ あん  
なやつ！ キルしてやろうか！ キルして……そっとキスして……ったく。しょうがねえ  
なあ。おい、待てよ！ 視ててやるよ」

輝が退場していく。

そこにコトーが登場する

コトー「どこだ……おーい！ しまったなあ。診療所から逃げ出すとは。腹をかつさばいたまま放置してたから、まさか逃げ出すなんて思いもしなかった。あんな内臓剥きだして感染症も怖いし、早く見つけなければ」

そこを通り過ぎる NARUTO 走りの J

コトー「見つけた！ あの走り方は！ 待て！」

コトーも NARUTO 走りになっている

コトー「なっ！？ いや、まさかな。よし、ちゃんと走ろう。クラウチングスタートでっ」と

やはり NARUTO 走りになる

コトー「まさか！ いや、違う。そんなわけない。きっと、疲れてるんだ。きっと、きっと……筋斗雲！ やや！？」

登場する BJ

BJ「どうしたんだい、筋斗雲なんて叫んで」

コトー「ぶ、ブラックジャック先生！」

BJ「まさか君も WJ1 に！？ なわけないか。はっはっは」

コトー「は、はは……」

BJ「で、筋斗雲と叫んでた訳は？ 納得できる答えをくれたまえ。10 秒以内に。さあ」

コトー「聞き違いです。自分は、キングコングと叫んだんです」

BJ「なんだと！？」

コトー「大好きなんですよ。ゴジラ対キングコング」

BJ「奇遇だな。私も大好きなんだ！ さあ、座りたまえ、せーのであらずじを頭から言っ  
て行こう。同時に。せーの！」

コトー「嘘です！ すみません！」

BJ「嘘？ どうしたんだ、君らしくもない。……らしくないと言え、私もか。聞いてくれ。つい、冷たく当たってしまうんだ。ピノコたちに。どうしたらいいか、わからないんだよ」

コトー「あの三人娘のことですか。先生、それは先生に問題があるわけじゃない。あの三人が、とてつもなく絡みにくいだけです」

BJ「そうか……しかし、あれは私が作り出したいわば娘のようなもの。難しいものだな」

コトー「先生にも、悩みがあるなんてね」

BJ「私も人間だよ。……ふふふ」

コトー「ぬるっふっふっふ」

BJ「ぬるっふっふ？ まるで少年ジャンプの暗殺教室に出てくる……」

コトー「うおっほん！ しかし、寒くなってきましたね。夜は冷える」

BJ「まったくだ。……この島で、たった一人戦っていたんだな君は。未知の新型ウイルスの攻撃を受けるかもしれないのに」

コトー「大和魂が守ってくれるさ」

BJ「少年ジャンプのキン肉マンがテリーマンに対していった台詞、だと？」

コトー「うおっほん！ さあ、そろそろ寝ましょう。明日も大変な一日になりそうだ」

BJ「そうだな。なにしろ、WJ1の致死率は100%だ。気合を入れねば」

コトー「そう、致死率はいちご100%ですからね」

BJ「少年ジャンプが誇る最強のラブコメ、河下水希先生のいちご100%だと！？」

コトー「うおっほん！ それでは！」

コトーが NARUTO 走りて去っていく

BJ「あの走り方……ドクターコトーは、WJ1に！？ ま、そんな訳ないか。ないない」

翌日

手術室に集まる一同。

Pの一族が外で遊んでいる

ピノコ「しっかり、暇なのよさ」

プノコ「ピノコさん、朝ごはんは食べましたかねえ」

ピノコ「あんた4杯もおかわりしてたのよさ！ 箸が立つぞ！ って言いながら！ 戦時中気分なのよさ！」

パノコはずっと天からのメッセージを受けている

ピノコ「あんたは何してるのよさ！ 電波女が電波本当に受け取ってたらビリビリクラッシュメンなのよさ！」

パノコ「もうすぐ、来る」

ピノコ「こっわ！ 怖い事言うんじゃないのよさ！」

プノコ「パノコさん、お薬の時間ですよ」

ピノコ「それ、ずっと言ってるけど、何の薬飲んでるのよさ」

ピノコ「白湯です」

ピノコ「白湯を薬としてるのよさ！？ どやさ！」

そこに疲弊した輝とBJがやってくる

ピノコ「先生！ 患者さんはどうなのよさ」

BJ「打つ手なしだ」

輝「血液中のすべての成分がWJ1に侵されていく。そんな感じでしたね」

BJ「全て侵された時、悟空ー！ ボン！ なんだろうな」

輝「ってことは、城之内さんはWJ1の抗体を持っているわけではない？」

BJ「他の患者よりも進行が遅い、ということは間違いないがな。どうしたものやら」

ドクターXYZが登場する

X「こんなところにいたの？ ドクターコトーが呼んでるわ」

輝「何かあったんですかね」

X「さあね。ただ、みんなの元気をオラにわけてくれって」

輝「へえ。元気、か。僕らの元気が力になるなら、いくらでもわけますよってね！ ね！ ブラックジャック先生！」

BJ「……、まさかな。よし、元気をわけに行くか」

翌日

Pの一族がいる

ピノコ「マジカルバナナ！ うんこと言ったら苦い」

パノコ「苦いと言ったらうんこ！」

ピノコ「うんこと言ったら苦い！」

パノコ「苦いと言ったらうんこ！」

輝とBJがやってくる

ピノコ「先生！ 患者さんはどうなのよさ！」

BJ「昨日に比べると、安定はしているが」

輝「難しいですね」

ドクターXYZが登場する



X「大変よ！」

コトーが苦しみながら登場する

コトー「痛い……」

BJ「どこが痛むんだ！」

コトー「まるで……切り傷をナイフでグリグリする万倍の痛みだ……」

BJ「まるで、邪眼を作る時の痛みそっくりだ……まさかな。大丈夫だ、ここにはこれだけの医師が揃っている。安心しろ」

X「ねえ、それ漫画の話？」

BJ「ああ。少年ジャンプ不朽の名作幽遊白書という漫画の設定でな。邪眼という第三の目を作るには、切り傷をナイフでグリグリする万倍の痛みに耐えないといけないんだ。当たり前のこときくんじゃないよ！」

X「彼、WJ1に感染してるんじゃない？」

BJ「なんだって?!」

X「絶対そうでしょ！ その症状は！」

BJ「バカな！ しかし、そう思えば、あの時のあれも！ あれも！ 合点がいく！ 点と点が……繋がってしまう！」

マス大山とドクターkも登場する

k「君も気付いたか」

BJ「やはり……？」

K「気づいたのは、さっきだ。私とマス大山がこの島で死んでいった人々に黙とうをささげていたら、彼が呟いたのさ。所詮この世は弱肉強食……ってな」

BJ「くそ……大人気漫画るろうに剣心に出てくる二代目人斬り抜刀齋こと志々雄真実の台詞だ。確定だな」

マス「どうにかせねば！ 急ごう！」

プノコ「私たちが食い止めます……いきますよ。ピノコさん、パノコさん」

ピノコ「時間稼ぎぐらいはできるのよさ！」

Pの一族が去る

X「え？ なに？ どういうこと、あれ？」

K「それっぽい台詞が言ってみたかったんだろう」

BJ「おそらくだが、一昨日の夜から感染していた。あの日、確かに言動がおかしかった……  
くそ！ ヒントはあったんだ！ なのに！」  
輝「三日ですよ。タイムリミットは」  
k「今夜がヤマか……」  
輝「死なせない！ 死なせないぞ！」  
k「ゴッドハンド輝。技術では我々に劣るが……自分の患者を死なせたことがないというその奇跡的なツキに、今はすぎるしかない」  
マス「全く、同じゴッドハンドでも空手家はこんなとき微塵も役にたたない。フルコンタクト空手ではウイルスと戦えないというのか。直接打撃を与えることができれば……」  
輝「直接……それだ！」  
k「そんなことが可能だというのか？」  
輝「わかりません。ただ、奇跡を起こさないと助けられないなら、僕は……奇跡を起こします！」  
X「全く、バカな小僧ね。……信じてあげるわ」  
輝「男のいう事だからですか」  
X「……あんたのいう事だからよ」  
マス「くだらない恋愛話など犬も食いませんよ」  
BJ「体内に入ることなどできるわけがない。アニメじゃないんだ！ だが……もし入れるなら……WJ1は喉の奥、扁桃腺を中心に繁殖している。つまり……」  
輝「俺たちが入るのは、ここかあ！ 唸れ！ ゴッドハンド！」  
コトー「ぎゃあああああ！」

輝の胸元の手形が光り輝き、コトーの扁桃腺に入る  
扁桃腺の中にはBJ、輝、マス

輝「ここが、扁桃腺の中か……」  
BJ「奇跡か……」  
マス「よし、急ごう！」

マスを止める一同

BJ「WJ1がどこにいるか、わかってるのか？」  
マス「わかるわからないじゃない。やるか、やらないかだ！ 急ごう！」

マスを止める一同

輝「とにかく落ち着いてください！」

BJ「その一、私が指揮をとるよ」

マス「このゴッドハンドマス大山は館長に相応しくないと?! 芦原! 芦原はいるか!」

BJ「違う。違うぞ。君には、後ろから我々を見守っていて欲しいんだ。最後尾が一番危険なんだ。WJ1 が後ろから襲われた場合、私や輝君のような凡夫では話にならない。君のような勇者が必用なんだ」

マス「説得としては50点。だが、諸々足して100点だ。あなたの指示に従おう!」

BJ「よし、とりあえず、散って探そう!」

輝「そんな、いきなり散ったら、最後尾云々で説得したマスさんがまたほたえるんじゃ」

マス「よし、急ごう!」

輝「ふう。マスさんが、脳までフルコンタクト空手で助かった」

探しさ迷うが狭い扁桃腺

BJ「めちゃくちゃ狭いな!」

輝「起きて半畳、寝て一畳。ユンケル錠は一日4錠って言いますからね」

マス「このヌメヌメした扁桃腺に正拳を食らわしてもいいですか」

輝「ダメですよ! コトー先生がむせちゃいますよ!」

BJ「フェザータッチならいけるんじゃないか?」

フェザーと触る

蒸せる声とKの怒りが袖から響き渡る

K「こら! お前達フェザータッチするんじゃない! むせてるぞ! 早くWJ1を探すんだ!」

BJ「怒られてしまったな。もう一度、探してみよう」

輝「ひだひだの間とか、ぬるぬるの中とか、くまなく調べましょう」

バイキンマンのテーマが流れる

菌「ばっびぶっべぼー」

一同「やや!？」

バイキンメンがリトルコトーを連れて現れる

菌「よくここまでやってきたな人間ども。俺様が、未知のウイルスを作り出している張本人、バイキンメン様だ！」

BJ「あ、ありえない！？

マス「バイキンメンとやらが自分でウイルスを作ってるって言ってるんだ！ ぶちのめせばいいだけでしょうが！」

輝「ウイルスと菌は違うんですよ！ 根本から！」

マス「寝言は寝て言え！ 医学は病院で語れ！ 死中に活！」

マスを止める一同

BJ「あの、ドクターコトーそっくりなあいつは誰だ？」

リトル「俺は、ドクターコトーの内なる存在、リトルコトーだ！ 君達、俺のことはどうなってもいい！ 俺事、貫け！」

マス「その意気やよし！ 死中に活！」

マスを止める一同

輝「あなたが死んだら、コトー先生はどうなるんですか！？

リトル「俺が死んでも、本体のビッグコトーはどうにもならん」

BJ「それなら安心だな」

輝「はい」

リトル「だが、風は止み、水は枯れ、大地は腐り、そして世界が減んでいく」

BJ「いっかーん！」

輝「絶対にリトルを死なせてはいけません！」

リトル「さあ、俺ごと貫け！ バイキンメンをここで駆逐するのだ！」

マス「いくぞ！」

マスを止める

貫け！ 待て！ の問答

リトル「俺はどうなってもいい！ この危険なウイルスがパンデミックを起こしたら、世界の終わりだ！」

輝「あんたが死んでも、世界の終わりじゃないかあ！」

菌「バカ野郎！ さっきから聞いてたら、もっと自分を大切にしろ！」

マス「死中に活！」

マス大山の一撃が、バイキンメンを貫く

菌「ぐあああああ！」

マス「手ごわい相手だった」

菌「やあああああ！」

バイキンメンがマスを羽交い絞めにする

みんなでわいわい、ほどけほどけ逃げろ逃げろとヤンヤする。

菌「油断したわ。ふっふふ。うぬらのような若造に、俺様が負けるとはな。だが、覚えている。ここで俺様を倒しても、第二第三のバイキンメンが必ずや世界にパンデミックを起こして見せる。大流行だ！ この言葉を覚えておけ！」

マス「い、嫌だ！ 嫌だあああ！」

菌「ばっびぶっべぼー！」

退場し、爆発音

一同「マサー！」

悲しむBJと輝

リトル「ありがとう。それじゃあ」

去っていくリトル。

輝「とりあえず、戻りましょう」

BJ「そうだな」

輝「さあ、胸に手を置いて」

BJ「え？」

輝「だから、この痣に手を合わせてください。早く戻りましょうよ」

BJ「あ、ああ。そんなの、行きは無かったからさ。すまない」

輝「俺がお前を守る」

BJ「……え？」

輝「ちょっとお！ 俺がお前を守る、俺もお前を守る、一緒に、死ぬときは一緒だ、でビュンでしょ！」

BJ「いや、無かったから。行きは。知らないから。ごめん。やるよ」

輝「俺がお前を守る」  
BJ「俺もお前を守る」  
二人「死ぬときは一緒だ」  
BJ「……何も起きないじゃねえか！」

全員が集合する

コトー「すっかり治りましたよ！ あなた達のおかげだ！」  
K「どうやら、WJ1の対処方法がわかったようだな」  
BJ「ああ、とりあえず説明は道中です。城之内君を助けよう」  
K「そうだな。急いだほうがいい」  
BJ「メンバーは、俺と、輝君と、ドクターKの三人だ。行こう！」  
K「待ってくれ。経験者が行ったほうがいい。ここは、君達二人が行くべきだ」  
BJ「何を言ってる。君の力が必用だ」  
K「いや、二人で行ってくれ。経験者だけのほうが動きやすいだろうし」  
BJ「違う、っていうか、マスのことにも触れろ！ あいつ、いなくなってるだろう！」  
K「命を落としたんだろう。危険だ。経験者が行ったほうがいい」  
BJ「その、マスみたいなやつが必用なんだよ。パワーで倒すから！」  
K「いや、無理だ。私は医者だ」  
BJ「俺たちもだよ！ お前、野獣の肉体持ってんだろ！？ パワー系で倒さないと駄目なんだって！ コトーは病み上がりだし！」  
コトー「いやあ、すみませんねえ！」  
BJ「おま……なんだその言い方！」  
コトー「いやあ、病気にかかっちゃってすみませんねえ！ 嫌な世の中だなあ！ 病気にかかって、怒られるとはねエ！」  
BJ「お前！ そもそも、お前隠すの良くないからな！ 感染した時にちゃんと言えよ！」  
コトー「ブラックジャック先生なら気づいてくれると思ったんですけどねえ！」  
BJ「こいつ！」  
輝「ちょっとお、行くんすかあ？ 行かないんすかあ？」  
BJ「態度！ なんでお前までふてこくなってんだよ！」  
K「私は、小さくなって扁桃腺に入るみたいな、非科学的なことは嫌なんだ！」  
BJ「うるさっ！ うるさいなあ！ でもそうやって治してきたんだよ！ とにかくお前は来い！」  
輝「ブラックジャックさんいい加減にしてくれよ！ こっちだってガキの使いで奇跡起こしてんじゃねえんだよ！ 早くしてくれよ！」  
BJ「お前は！ お前はせめてこっち側でいろよ！ 仲間のスタンスでいろよ！ ずっと！」

輝「じゃあ、はい、胸に手を置いて。わかるだろ！ 何回もやってんだから！」  
BJ「行く時なかっただろ！ お前が一人ではああってなっただけで！ わかったよ！ ほら、置いたぞ！」  
輝「あれ、なんかピンとこないなあ。すみません、ドクターXYZ置いてみてくださいか」  
X「こう？」  
BJ「おい、お前それ、エロいやつだろ。下心のやつだろお前。手相見れるからのフリして手を触ってくるやつのやつだろ！」  
X「どうしたらいいの？」  
輝「もっとう、フェザーって感じで全体的にさわさわしてくれたら……」  
BJ「はいはい。フェザーフェザー」  
輝「ああああ！ 」

ワープする一同  
映像 写真コマ送り

ナレ 「城之内の体内に入った一同は、無事、バイキンメンを倒すことに成功したが、全く同じパターンでドクターkは死んだ。  
そして後日、交通事故で城之内も死んだ。  
孤島から逃げた感染者を追い、世界を回る医療アベンジャーズ達。  
しかし、ウイルスは、恐ろしいウイルスへと変容したのだ。  
ADM1。  
集まれどうぶつの森ウイルスである。  
このウイルスに感染すると、金に汚いタヌキゾンビへと変身してしまうのだ。  
対処法も見つからないまま、世界の人口の80%が死滅した。  
生き残った人々は、タヌキゾンビの手の及ばない、巨大なオフホワイトメガタワーを建造し、その中で生きることになった。  
そして、5年の時が過ぎた。」

第二章 「オフホワイトメガタワー～ボクらの七日間ホスピタル戦争～」

買い物客が列挙している。  
店員が大声で並ばせている

店員「整理券をお持ちの方のみ、マスク、消毒液、トイレトペーパー、ナイストールの販売が可能です！ 整理券を持ってる人のみお並びください！」  
客1「おい！ ちょっと待てよ！ 整理券なんて持ってねえよ！」

客2「そうよ！ 差別しないでよ！」  
店員「整理券は毎日10時~12時の間に抽選でおにぎりと一緒にお配りしてますので！」  
客2「だから、そんなの不公平よ！ 欲しいものちゃんと売rinaさいよ！」  
客1「だいたい、裏にあるんだろ！ 在庫が！」  
店員「本当に必要としてる人に行き届くように演算されてますので」  
客1「本当に必要なんだよ！ 子だくさんなんだよ！」  
店員「え、もしかして……」  
客1「そうだよ。ビッグダディだよ」  
客2「え、この人、ビッグダディ？ トウク……」

そこをBJと輝が通りがかる

BJ「君達」  
客2「何ようるさいわね！ こちとら裸のみなこ@婚活中なんだから！」  
BJ「密です」

爆発音。  
客達が去っていく

店員「あの、ありがとうございます！」  
BJ「いや、すまないね。もっと我々が物資を集めれば」  
店員「いいんです。頑張ってください！ 色々言われてはいますけど、私は応援してます！ 市長の事！」

店員が去っていく

輝「密を許さない、という気持ちの温度を極限まで高めて熱光線にして放つ、密です。さすがですね」  
BJ「密です、を撃てるようになった時、私はメスを置いたよ」  
輝「今のあなたに、メスは必要ありませんよ。市長」  
BJ「輝君……」  
輝「辞めてください。ゴッドハンド輝という名前は捨てたんです。僕は、助けることが出来なかった……ドクターXYZを……。今の僕は、ゴッドハンド輝改め、オフホワイトメガタワー31階シティの市長ブラックジャックを支える秘書こと輝秘書太郎です」  
BJ「だから、輝君って呟いたわけだが」  
輝「確かに。問題は僕の心にあるようだ。さあ、今日もスケジュールがいっぱいですよ。ま



ず、生コン会社の社長連中が癒着の会合を開いてるみたいです」

BJ「密、か。行こう！」

生コン会社の社長連中とコトーがいる

社長1「いやあ、市長。ほんまに、たのんまっせ」

社長2「そうでんなあ。最新のコンピューター技術が使われたタワーとはいえ、角っことか、隅っこにはコンクリが必用になってきまっしゃろ？」

コトー「そうですね。まあ考えておきましょう」

社長1「よっしゃよっしゃ、とりあえず今日は宴会や！ コンパニオン呼んで抜きつ抜かれつ後ろから前からや！」

コトー「む……」

社長2「どないしはりましたんや？ そんな核融合に成功したものの、これが後に人類の歴史を変えてしまうような大量破壊兵器を生むんじゃなからうか、と未来を危惧してるみたいな顔して」

コトー「いえ、申し訳ないが、私は席を外します。それでは」

コトーが去っていく

社長2「なんやなんや。けったいなやっちゃで」

社長1「せやけど、こっちのボンクラ市長に比べたら、融通のきくやっちゃ。さ、女装男子コンパニオン相手に、挿しつ挿されつ後ろから前からや！」

そこに登場する BJ と輝

BJ「そのボンクラ市長がここにいるわけだが」

社長1「曲者！ 出会え出会え！」

輝「200人のムキムキ黒人用心棒は既におねんねしてるよ。心臓を止めたからね」

社長2「なんてことを！ 人道にもとるで！」

社長1「塔の外ではバイオハザード！ 塔の中ではモラルハザード！ 天誅！」

BJ「密です」

爆発音。社長が四散する。

輝「バイオハザードよりも愛のハザード。三途の川の船代だ。受け取れ、ブラックサンダー」

輝がブラックサンダーを投げつける。

そこにコトーが現れる

コトー「さすがですね。ブラックジャック市長」

BJ「やはり君か。ドクターコトー。いや、メイヤーコトー」

輝「30階市長のあなたが、なぜ31階に？」

コトー「なぜ？ おかしなことを聞く。31階だけ鎖国でもしているのかね？」

輝「ぐぬう。口八丁手八丁、八丁味噌ベトリ団地妻お米屋ケンちゃん」

コトー「しばらく見ない間にバグったな。まるであの三人姉妹のようだ」

輝「バグ扱いはされるのは遺憾です。いっかーん！ 人生にデバッグ作業はないんだ！」

BJ「そんなことより」

輝「ぶるん」

BJ「なぜ君が、癒着の会合に？」

コトー「さあ。私はド腐れ社長連中と食事をしていただけですよ」

BJ「31階は、コンクリート産業から手を引く」

コトー「可哀そうに。失業者が増える」

BJ「だからといって、必要のないものを作り続けても仕方がない」

コトー「革新とは、時に残酷ですね」

BJ「アフターケアは誠心誠意、真心をもって執り行う」

輝「真心を君に。ブラックジャック市長のマニフェストです」

コトー「真心で、食っていただけますか」

BJ「そのために私が市長になったんだ」

コトー「30階は、コンクリートが必用なのでね」

BJ「旧時代の感性に埋もれるなよ、コトー！」

コトー「誰しものが、革新を求めているわけではないのだ！ ブラックジャック！」

BJ「貴様が悪の道に染まると言うのなら……」

コトー「どうします？」

BJ「密です！」

コトー「密です」

密が消滅し合う

輝「なんだと!？」

コトー「自惚れないことだ。密ですは、あなたの専売特許ではない」

BJ「コトー……！」

コトー「何が正義で何が悪かは、時代が決めることだ！ また会おう！」

コトーが馬に乗り去っていく

輝「なんて野郎だ！ 塩まいとけ塩！ はい！ 塩、がっさー！」

BJ「しかし、懐かしい顔を思い出した。三人姉妹か」

輝「働かなくっちゃ。働かなくっちゃねえ」

Pの一族が登場する

塔の外で何かを漁っている

ピノコ「ステーキステーキステーキ……」

パノコ「ピザピザピザピザ」

プノコ「白湯白湯白湯白湯」

ピノコ「ダメなのよさ！ ステーキなんて落ちてないのよさ！」

パノコ「静かに！」

プノコ「パノコさん、まさか……」

パノコ「聞こえる……闇を蠢く音……」

三人が隠れると暗転

爆音でどうぶつの森のタヌキの声と何かが蠢く音

しばらくして音がなくなると明転

ピノコ「ひいひい！ おっそろしい！」

プノコ「おかしいわね。まだ明るいのに……」

パノコ「太陽の光に順応してきている……？」

去っていく三人

BJと輝はいる

BJ「みたいなことになってたらしいのにな」

輝「今の、市長の想像だったんですね」

BJ「だがそんな事はある得ない。あいつらは……WJ1 ウイルスに感染してそのまま ADM1 に……。パピプノコ、私は、頑張るよ」

市民が集まってくる

ロックダウンするかどうかで喧々譁々している

「街をロックダウンしろ！ 殺す気か！ #ブラックジャックに殺される！」

「バカ野郎！ 経済を止めたら自殺者が出るだろ！」

輝「ウイルスを嫌って塔を建てたのに、その中で違うウイルスが流行するなんて、ままなりませんね」

BJ「新型タバコモザイクウイルス。世界で一番最初に発見されたタバコモザイクウイルスが人間に感染するようになり、重症化した人間はモザイクになって死ぬ」

輝「インフルエンザよりも致死率が低い。ただの風邪で経済を止めるなんて声があります」

BJ「モザイクになって死ぬウイルスのどこが風邪だ」

輝「40階と42階でワクチンが完成したらしいのですが……」

BJ「今の段階じゃただの人体実験だ。後遺症はその名の通り後からやってくる。クスリを逆から読むとリスク。オーガニック食品でどうにかするしかないんだ」

#### 市民が騒いでいる

「いい加減にしろ！ 一日の感染者数が1000を超えて来てるぞ！ 完全に第三波だ！ 自宅待機だ！ 手厚い金銭手金保護だ！」

「どのみちスーパーやコンビニには行くんだろうが！ 配達員だって動くんだ！ 完全に止めれやしないんだ！」

「辺野古から米軍を……」

BJ「なんかプロ市民が混じってるな！」

輝「悲しいけど、もう辺野古も米軍もないですからね」

BJ「結局、密になっている……」

輝「私が、彼らを盲腸のように散らします」

BJ「……いつもすまないな……」

#### プロ市民の中に輝が現れる

「ちょっと！ 秘書よ！ あれ、秘書よ！」

「君ねえ！ 22時から20時になったところで、どれだけの効果があるんだい！」

「安保反対！ 安保反対！」

輝「えー、市民の皆さま。そして、プロ市民の人。ブラックジャック市長の秘書こと輝秘書太郎です。私の独断でただいま会見を開かせてもらっております。えー、プルーン由来によ

るミキプルーンを接種することで、タバコモザイクにある意味打ち勝てるのではないかとすら思っています。まあこれはまだ研究段階のことですので……」

記者「それは、どの程度信用できる情報なのでしょうか」

輝「先ほども言いましたとおり、研究段階のことですが私の独断的にはイケイケだ、ということですよ」

記者「裏付けなどはあるのでしょうか」

輝「それに対する答えは三つあります。細かいことは、ミキプルーンに聞け。以上ですよ」

記者「ふざけるんじゃないよ！」

記者「この間はキヨーレオピンが効くかもって言ってじゃないか！」

輝「皆さん、買い占め行為だけはお辞めください。ミキプルーンが買い占められたら、困る人が沢山います」

記者「困るわけないだろ！ 誰が食ってんだ！ ミキプルーン！」

記者「どのタイミングで食うもんなんだ！ ミキプルーン！」

輝「感情的になられているようだ。これじゃあお話になりませんね。それではまた」

退場する輝

「あの人なんなの！？」

「戦争反対！」

あまりにもうるさいプロ市民に辟易して皆が去っていく

早乙女「どうも。ある時はプロ市民、そしてある時は過激派。その正体は、早乙女研究所からやってきました早乙女博士です。オフホワイトメガタワー。プロ市民のふりをして、やっと潜入できたぞ……。プロ市民は基本嫌われるから、中々入れなかった。作戦ミスだ。素直に認めよう。さて、黒幕がいるはずだ！」

早乙女博士が付近を搜索しているとブラックジャックと輝が現れる

BJ「すまなかったね」

輝「メディアや市民から私が袋叩きにされてる間に、市長は塔をよりよくする方法を考えてくださればいいんです！」

BJ「そうだな……。まずは、各階の市長と手を取り合わねば」

輝「それが一番難しそうですもんね。ん？」

コトーが現れ、緊急会見を開く

コトー「えー、オフホワイトメガタワー30階市長のメイヤーコトーです。私は言いたい。このままでいいのか！ オフホワイトメガタワー！ この塔は、29階から51階までが一般層、それ以上の階層は一握りの富裕層と軍隊が存在することになっています。だけど、28階から下がどうなってるか、知っていますか？」

BJ「コトー！ 塔の闇に触れる気か！？」

コトー「ADM1は限りなく地表に近いところでしか存在できない、ということだけがわかった我々は、オフホワイトメガタワーを作った。ならば28階から下は、地上から続くエレベーターなのか？ 違う！ そこには、人が住んでいる！ いや、人とは呼べないかもしれない。もはや、人権などは認められていない。マイナンバーなど発行されない。そんな闇に生きる者たち。通称流星街の住人がいるのです！」

輝「荒れますね。塔が……」

コトー「我々は、そんな隙間だらけの階層に目を瞑りながら生きているのです。私は、下の階層の人間を救いたい！ コンクリートを使い、下の階の隙間を埋める！ 天高く逃げても、結局ウイルスの脅威からは逃げられていない！ 私は階ごとの自治をもっと集結させるべきだと思っています。富裕層には搾取され、貧民層には目を瞑るこの時代に未来があるとは思えない！ 手始めに29階と30階は今日一つになりました。物理的にも概念的にも。その総合市長は私メイヤーコトー！ さらに31階を解体し、29階30階を含めた一つの集合体、コミュンとするコミュン構想を打ち立てます。市民の皆様、投票で決めましょう。ごちゃごちゃ言わんと、投票したらええやんか！」

市民たちが登場しザワザワとしている

BJ「決選投票権を行使する気か」

輝「市長が望めば、市民による決選投票が行われる」

BJ「決選投票で負けた市長は、塔から追放される……それすなわち、死！」

輝「何が権利だ……」

早乙女「やはり、上にいる。勸善懲悪なレベルのがつつり目の悪が！」

BJ「決選投票権を行使される以上受けて立つしかない。コトーの言ってることは、間違いではない。だが、よく聞くと何が言いたいのかよくわからない！ 負けるわけにはいかん！」

テレビ討論会が始まる

司会のクーリングオフ棚橋が登場する

棚橋「どうも。元芸人で、現在はやや左寄りのワイドショー番組でやや左寄りの発言を多くしていますが、実際は右も左も思想的になにも持っていない、からっぽなコメンテーター、

クーリングオフ棚橋です。今日は決戦投票を控えたブラックジャック市長とメイヤーコトーに来て頂いております！ さあ、朝まで生討論会！」

コトー「私は、これまではバラバラだった 29 階と 30 階を一つにしました。これは、無駄をなくすということなんですね。現在、塔の中には格差があります。特に、29 階から 31 階は、ブルーカラーの階だと呼ばれている」

BJ「私はそうは思わない」

コトー「現に、各階ごとの平均収入で差が生まれています。これを見てください。去年一年間の各階における平均収入です。」

映像にグラフが出る

29 階平均 220 万オフメガ

30 階平均 252 万オフメガ

31 階平均 249 万オフメガ

32 階平均 310 万オフメガ

.....

39 階平均 467 万オフメガ

40 階平均 622 万オフメガ

41 階平均 619 万オフメガ

.....

51 階平均 2890 万オフメガ

コトー「火を見るより明らかです。階層が上がれば上がるほど年収が上がっている。40 階と 50 階あたりで、視えない壁があるのかというぐらい、グンと差がつきます。そして何より注目すべきは、32 階からの格差です。市民の収入が少ないという事は、税収も少ない。全てが貧乏になっていく。負のループが生まれるのです」

BJ「真心を持つことだ。誰もが真心を持てばきっと……」

コトー「規模的に、29 階 30 階 31 階はほとんど変わらない。人口も減少傾向にある。それなのに、それぞれの階で独立した政治を行うことは無駄でしかない。一つのコミュニケーションとしてまとめ、階ごとにある役所を総合コミュニケーション役場に統一。議員もコミュニケーション戦士として統一し人数を減らす。そして、ただ人員をカットするわけじゃない。それぞれの階にあった行政関連の建物跡地等に新たなショッピングモールなどを誘致し建設ラッシュを起こし、それを公共事業として仕事を回し、それぞれの子会社に天下りさせます」

BJ「天下りだと！？ そんなことが許されるものか」

コトー「天下りの何が悪い！ それならば、ただただ失業者を増やせば正義か！ 天乗りならば、能力がない人間が勝手に上にあがろうとするのかと怒りもするが、天から下がっているのだ。能力主義ではあるが、落ちたところからまた這い上がるか、さらに落ちるかは本人

の資質次第。もちろん乞食からでも上に上がれるよう乞食枠の雇用も常に執り行う。他にもシングルマザー枠、シングルファザー枠、肥満枠、すつとこどっこい枠、サッカーで推薦入学したものの怪我して学校を辞めてグレちゃった人枠。それこそ数限りなく雇用の枠を用意する。そのために、狂ったように道路工事もする。職を選ぶ余裕はないが、職にはつける。いや、つかせてみせる。このスラム街を……立て直して見せる！」

棚橋「いやあ、節々に若干の差別意識的なものを感じずにはいられませんが、熱意は相当なものです。ブラックジャック市長は、このコミュニンに反対なんですよ？」

BJ「私は、一つにまとまること自体を悪だといってるのではない。ただ、そこに真心があるのか、ということです。そこに真心がないのならば、私はコミュニンを許すわけにはいかないし、彼を市長として担ぎ上げることはできない」

棚橋「すると、コミュニン自体は悪くないと」

BJ「それが真心コミュニンであるならば、私は喜んで手を貸そう」

棚橋「仮に、ブラックジャック市長がコミュニンの総合市長になった場合、どういった政策を？」

BJ「今回の決選投票は、コミュニンにするか否か、が争点だ。私は現時点ではコミュニンに反対している。31階市長としてメイヤーコトーの行為は侵略とすら思っている。29階と30階が一つになったことに口出しするつもりはない。だが、31階は時代の流れに乗り、コンピュータ化を進め、そして、真心を君に」

コトー「それこそ、真心がありますか？」

BJ「ある。真心はここにあるんだよ。コトー」

コトー「あなたの真心に、人はついてこれないんだ。ブラックジャック」

BJ「なぜわからない。階が上だの下だの、重力に縛られるな！」

コトー「その重力のかかる場所に、我々の階があるんだ」

BJ「そこから解き放たれなければ、未来がないことに何故気づかんのだ！」

コトー「現実がある。未来よりも先に、現在という名の現実があるのだよ！」

棚橋「えーっと……ヒートアップして参りましたが……それでは最後に一言ずつよろしくお願ひします」

コトー「私は、シンプルだ。古いやり方でもなんでもいい。とにかく、現状を打破したい。それだけだ」

BJ「真心を、君に」

棚橋「ありがとうございます。それではシーユーnext 決戦投票！」

輝がBJをマッサージする

輝「素晴らしい討論会でした」

BJ「勝利は確信しているよ。コトーには、真心がない」



輝「もし、市長が負けることがあれば……」

BJ「輝君、まさか……」

輝「この命に代えても、奴を！」

BJ「やめておけ。彼は密ですを放つことができる。君では勝てない。もし私が負けたら、いやあの討論会を終えた感覚で言えばそんなことはあり得ないんだが。負けたら私は塔外へと追放される。だが君は追放まではされないだろう。それこそ、天下れ」

輝「そんな……！ 天下りなんて、絶対に……！」

BJ「チャンスを伺うんだ。命あつての物種、生きててなんぼのコーヒー豆。というだろう？」

輝「……大丈夫です。市長は負けませんから！」

BJ「ああ、そうだな。必ず、勝つぞ！」

映像で投票が行われる。

1対599999でBJが負ける

BJ「やややや！」

輝「市長には、僕しか入れていない！？」

BJ「なんてことだ！ なんてことだ！」

輝「し、市長、嫌だ！ 天下りたくない！ 天下りたくない、やめろ！ やめろ！」

輝が連れていかれる

BJ「輝くーん！ くそ……なんてことだ！ 重ね重ね申し上げる！ なんてことだ！」

そこに現れる早乙女

早乙女「ブラックジャック市長、いや、元市長か」

BJ「君は？ まさか、ドクターK?! すまないそんなはずはない。彼は死んだ……」

早乙女「私は早乙女だ」

BJ「早乙女君か」

早乙女「ドクターKあらため、ね」

BJ「そうだったのか！ 改めてたんだな……よかった……！」

早乙女「君は追放される。行くあてはあるのかい？」

BJ「そんなものはない……外は、タヌキゾンビが跋扈する地獄だろう。追放されたら死あるのみ」

早乙女「……私は外から来た」

BJ「なんだってえ！？」

早乙女「確かに ADM1 は危険なウイルスだ。だが、とある全集中の呼吸を使う三人組がその ADM1 を跳ね返す呼吸法を見つけ出し、会得できた者たちは外で生きている」

BJ「全集中の呼吸だと……？ そんな WJ1 患者みたいな三人組が……まさか！？」

早乙女「感染中に会得した、と言っていたな。生きているよ。彼女たちは。P 地点まで行きたまえ。さあ、このダストボックスから行くんだ。一番怪我をせずに済む。他の追放者たちは、トゲトゲしてる穴から外に出される！」

BJ「なんでそんな無意味なことばかりするんだ！ 人間は！ ありがとう！ また、いつか会えたら！」

BJ がダストボックスでシューっと塔外に出される

BJ「うわあ！ ダストボックスで塔の外に出ることになるとは、思いもしなかったなあ！ふう……っていうか、P 地点ってどこにあるんだ」

辺りは怪しい雰囲気 怪鳥の鳴き声

BJ「タヌキゾンビだけじゃないな。悪の道に染まった始祖鳥みたいなやつもウロウロしてる。生態系が狂っているんだ。それでも生きるしかない！」

BJ「緊急事態だから 生きるしかないから 正解などないから 立場が変わるから 言う事もバラバラ 情報がバラバラ 会食してハラハラ どうしますあなたは 緊急事態だから 生きるしかないから 正解などないから 立場が変わるから 言う事もバラバラ 情報がバラバラ 会食してハラハラ どうしますあなたは

ここは塔の外つまり下界 俺は元市長元外科医 とっくに狂ったこの世界 タヌキゾンビの気配に眩暈 タヌキの仕事は殺すこと どこにいるピノコパノコプノコ タヌキの見事な殺す方法 一人は嫌だピノコパノコプノコ」

ピノコ「声が聞こえた 声が聞こえた 懐かしい先生の 声が聞こえた」

パノコ「音が聞こえた 音が聞こえた ミキプルーンを飲む 音が聞こえた」

プノコ「BJ の旗の下集う我ら P の一族 タヌキゾンビ避けて探し出して皆でイチゴ食う」

P の一族と BJ が出会う

BJ「お前達！」

ピノコ「先生！」

パノコ「生きてたんですね……」

プノコ「よかった……」

BJ「お前達こそ、生きていてよかった……ウイルスを弾き飛ばすとは……」  
ピノコ「なんで先生はこんなところに来たのよさ？」  
BJ「色々あったんだ。コトーに負けたのさ。私も、お前達と一緒にここで暮らすよ」  
ピノコ「何言ってるのよさ！ あたいたちは、塔に侵入しようとしてるのよさ」  
BJ「なんだって！？ やめておけ。今の塔は……コトーの手によって恐ろしい軍事国家と化している」  
パノコ「早乙女博士のゲッター線の呼吸により、情報はこちらにも来ています」  
プノコ「博士曰く、どうやらドクターコトーも、住人も、変な怪電波を受けてるんじゃないかって」  
BJ「怪電波って、パノコみたいなやつか？」  
パノコ「はい」  
ピノコ「塔の中をコントロールしてる存在がいるって」  
BJ「一体……」  
ピノコ「スーパーコンピューター超富岳だって」  
BJ「おお、全部、応えてくれるんだな」  
プノコ「博士はそれを調べに行ってるんです」  
BJ「しかし、超富岳が……？」  
ピノコ「それであたいたちも応援ってわけなのよさ！ 先生も行くのよさ！」  
BJ「だが、塔に戻っても私の居場所はもうない……お気に入りの座椅子も捨てられてるだろうし」  
ピノコ「何言ってるのよさ！ 先生がやらなきゃ、誰がやるのよさ！」  
BJ「私は負けたんだ！ あと、早乙女君がやるだろう！」  
菌「お前が負けただと？ お前に勝つのは、この俺様だ！」

バイキンマンが現れる

BJ「お前は！？」  
菌「俺様は、この世に残った最後のバイキンメン。つまり、バイキンマンだ！」  
プノコ「バイキンマンさん。あなたも戦うというのね？」  
菌「勘違いするな。人類を滅ぼすのは俺様だ。そして、そこの腑抜けを倒すのよさ」  
BJ「バイキンマン……なぜお前が……」  
菌「全ての答えは、オフホワイトメガタワーの最上階にある。俺様を作り出した……マザーがそこにいやがる」  
パノコ「母を倒すと言うの?!」  
菌「あんなものを母と思ったことはない！ 現に、WJ1 ウイルスは、我々バイキンメンを糧にADM1へと変容した。我々は餌だったんだ。ウイルス進化のためのな。笑わせる。何が

バイキンメンだ。誰がやなせたかした！ 我々はただの道化だったのだ！」

BJ「お前はなぜ無事だったんだ」

菌「その女が守ってくれたのさ」

プノコ「私が守ったんじゃない。あなたが、生きたいと願った。他のバイキンメンと違ってね」

BJ「さっぱりわからんが、もはや理解する時間が惜しい。つまり、お前が仲間になるってことか」

菌「一時的に手を組むだけだ」

BJ「昨日の菌は今日の友、か。よかろう。お前と手を組んでやる」

菌「ふん。今日の友は、明日のパンデミック。ともいうぞ」

BJ と 菌 が 握 手 を す る

ピノコ「それじゃあ、塔への最短ルートを模索するのよさ！」

プノコ「タヌキゾンビとはできるだけ遭遇しない道を歩まないと」

パノコ「電波の呼吸、壱の型、電波！ わかりました、ここを真っすぐです！」

BJ「よし、地獄への道のりだ。進むぞ！」

塔内。輝とコトーがいる

輝は椅子に縛られ、眼前に糞をつきつけられている

輝「メイヤーコトー、なぜこんなことを！ やめろ！ 犬の糞はやめろ！」

コトー「安心したまえ。人の糞だ！」

輝「もっとやめろ！ 人の糞はやめろ！」

コトー「輝君。君は共に戦った仲間だ」

輝「だったらやめろ！ 人の糞はやめろ！」

コトー「ブラックジャックも仲間だった。だが、今は違う。立場も違えば時代も違う。君はあちら側の人間だ。自由にはできないんだ」

輝「なぜなんだ、メイヤーコトー。あなたはなぜ変わってしまったんだ」

コトー「確かに私は変わったかもしれない。だが、ブラックジャックも、君も変わっているんだ」

輝「俺たちは変わってなどいない！」

コトー「秘書太郎に改めといて何を言うんだ」

糞を近づけられ悶絶する輝

輝「やめろ！ 人の糞はやめろー！」

早乙女がそれを覗いている。

早乙女「ううむ。何もしっぽが掴めんな……」

そこにくのいちがやってくる

くノ一「早乙女殿！」

早乙女「くノ一。何か掴めたか？」

くノ一「いえ。やはり51階より上は進めません。レーザーみたいなやつがビュンビュン出  
ています」

早乙女「ぬうう。やはり、市長の権限が必要か……」

コトー「密です」

早乙女「いかん！」

早乙女は避けるがくノ一は直撃する

くノ一「ぎゃああ！」

早乙女「貴様！ 女の顔に傷を！」

コトー「ここは戦場だ！ 傷つくのが嫌なら出てくるんじゃない！」

早乙女「確かに！」

くノ一「早乙女殿、私はまだやれます！」

早乙女「離れていなさい。いかに流星街の忍びとはいえ、彼は手強い」

コトー「君は、流星街の……」

くノ一「そうだ！ 流星街忍者ウォーリアーズのくノ一、久野一だ！」

コトー「そして、君は……まさか……改めていたのか？」

早乙女「さすがだな。ドクターK改め、早乙女博士だ」

コトー「便利なものだな。改めるといふのは。死すら改めることができるのか」

早乙女「コトー。君は、操られている」

コトー「私は操られてなどいない」

早乙女「超富岳に操られているんだ！」

コトー「きゃつの洗脳ならもうとっくに解いているさ」

早乙女「なんだって!？」

コトー「くノ一よ。流星街の現状、申し訳ないと思っている。私は、必ずやこの塔を、たて  
なおしてみせる！ 文字通りな！」

コトーが馬に乗って去る

早乙女「大丈夫か！」

輝「うう……なんとなくやむやになって助かった……」

くノ一「いけません。動いては」

輝「あなたは……ドクターXYZに似ている……まさか、改めて？」

くノ一「改める？ はあ？」

早乙女「無駄だ。改めるが通用するのは、なんというかほんの一握りなんだ」

輝「ジェネレーションギャップ、か……」

早乙女「それよりも、力を貸してくれ。塔の上層部へ行きたい。君は市長の秘書をしていた。

何か抜け道はないのか！」

輝「51階より先は市長でも申請をしなければ通れな……待てよ、あれならあるいは……」

早乙女「なんだ！ 藁にもすがりたいんだ！」

輝「思念体になって……」

早乙女「思念体か……」

輝「それ以外は見当もつかない」

くノ一「思念体は無理よ。そもそも思念体がどういうことかがわからないもの」

早乙女「そうか。足を引っ張るな。くノ一は」

くノ一「ぐう……かたじけない。この塔から飛び降りて消えてしまいたい」

輝「そうか、塔の外だ。外壁を登ればいいんだ」

早乙女「外壁を？ しかし、外壁はローションが塗られていてヌルヌルだぞ」

輝「29階まではそうです。流星街の面々が昇ってこれないようにローションを巻いている。

でも、31階ならもうヌメってないはず」

くノ一「でも外に出る扉などは無いはずだろ？」

輝「一つあるんだ。塔内と外を繋ぐ唯一の場所。巨大換気扇がな！」

早乙女「なるほど！ 換気扇か！ そこから外に出て、上に登っていけば！」

輝「仮に到達できても、外壁から中に入れるかもわからないけど……とりあえず上層部には

行けると思います。まあ、換気扇から出るのが一番大変だと思いますが……」

早乙女「ありをりはべりいまそかり！ やるならやらねば！ やってみよう！」

塔の下についたBJたち

BJ「さて、どうやって侵入するかだ。流星街ならば壁の隙間から入れそうだが……」

菌「簡単なことだ。壁を登っていこう」

BJ「ダメだ。使用済みのローションを廃棄するために使われている。ヌルヌルだぞ」

菌「誰に言っている。俺様はバイキンマン様だぞ。ヌメリなど気にしない」  
BJ「気にするしないを言ってるんじゃないんだ。ぬるっとなって登れないって言ってるんだ」  
菌「先に言え！ 恥をかかすな！」  
プノコ「ぬるっとなってすべるまえに手を伸ばし、その手が滑る前に手を伸ばしてドンドン上にあがりましょう」  
ピノコ「それしかないのよさ！ あっちょんぶりけの呼吸！ 壺の型！ あっちょんぶりけ！」  
BJ「ん？ うん。とりあえず、行こう」

壁を登り始める一同

BJ「案外いけるもんだな」  
菌「そうだな。保菌者の俺様でも、これは可能だ」  
ピノコ「ばい菌のオッサン」  
菌「なんだ」  
パノコ「ちょっと待って！」  
Bj「どうした、あ！」

全員がぬるっとなって落ちる

プノコ「ダメよ！ 止まったらぬるっとなって落ちちゃうんだから！」  
ピノコ「えらい目にあったのよさ！」  
パノコ「ごめんなさい、でも感じたの。明らかな悪意を」  
BJ「こんな大事なタイミングで、電波飛ばしてるんじゃないよ！」  
菌「いや、この女は電波の呼吸が使える。その悪意、ただの電波じゃなさそうだ」  
パノコ「ええ、感じたの。悪意を。ピノコ姉さん。あなたから！」  
BJ「なんだって?!」  
ピノコ「シンプルに、ばい菌のオッサンのせいで WJ1 に感染したから、普通に苛立ってはいたのよさ。その文句を言いたかったのよさ」  
菌「くだらん！ 水に流せ！ ばい菌だけにな！」  
BJ「そんなの事前に処理しとけよ！ さあ行くぞ！」

塔を登り始める一同

菌「BJ」

BJ「なんだ」

菌「貴様に問いたい」

BJ「だから、なんだ」

菌「貴様は強い。どうしたらその強さが得れる」

BJ「その強さは自覚できてはいないが……お前の仲間を倒し続けたのは私じゃなくてパワーファイトを得意としていたマスやドクターKやXYZだったからな。だが、あえて言うならブラックジャック印のキビ団子のおかげだ」

菌「なんだそれは」

BJ「いいか、まずミキプルーンを……あっ！」

落ちるBJ。それについてくる皆。

菌「おい！ 気をつけろ！」

BJ「す、すまない。でもなんでみんなもわざわざ落ちるんだ！ 一人でも早く上に行くべきだろう！」

プノコ「ここまで来たら、みんな以心伝心、宇宙船地球号じゃないですか」

BJ「ん？ うん。とにかく急ごう！」

また登りだす一同。

塔の中ではコトーが審問を受けている

富岳1「なにやら、勝手な行動をしているらしいな」

富岳2「我々がタワー内の行動はなんとなく把握できることを忘れたのか？」

コトー「いえ、あくまでも私は超富岳の理念を行動に移しているだけです」

富岳3「ほう。つまり？」

コトー「優秀な遺伝子だけを残し、その他を排除することです」

富岳2「ふむ。流星街を救うことは、その真逆では？」

コトー「これは一見、力無きものを救う行動に見えますが、その実、力有る者と無き者とを完全に分けるための行動です。コミュニケーションも、私が独裁できるように、つまり超富岳の理念通りの行動が取れるよう構想したものです。沢山の長がいるから、動きにくくなることもあるのでね」

富岳1「君は優秀だよ。コトー」

富岳3「人間は、私を作り出した。人間よりも優秀なこのスーパーコンピューター超富岳を。そして私を使い、希望の未来を作り出そうとした。だから私は考えた。希望の未来を」

富岳2「優秀な者だけが存在する、理想の世界」

富岳1「人類を減らす必要があった」



富岳3「WJ1で大半の人間が死んだ。変異したADM1でさらに死んだ」

コトー「パンデミックにより、人間の本性は明るみになっていく。さらにふるいにかけられる」

富岳1「優秀だと思う人間には、私と共に歩めるようこうやって接見を許している。君を含めて、たった3人だがね」

コトー「もうすぐですよ。優秀な人間だけを選別します」

富岳3「急ぎたまえ」

コトー「シナリオ通りに進んでいます。ちょっとしたアドリブは入れてますが……ランタイムを伸ばすつもりはない」

#### 審問が終わる

コトー「漫画やアニメカルチャーに毒されたポンコツめ。死ぬほど恥ずかしいことをやらされた。吐き気がする。必ず、超富岳を駆逐してやる！ む、俺も毒されているのか。急がないとな……」

#### 塔に登っているBJたち

BJ「ふう……これどこまで登ったんだ」

パノコ「電波の呼吸、壺の型！ 電波！ 5階です」

BJ「全然だな！ 全然じゃないか！」

菌「騒ぐな。言うだろう？ ナイルの賜物だって。違った。ローマは一日にしてならず、って」

ピノコ「ばい菌が無理やり格言語るんじゃないのよさ！」

プノコ「それにしても、このヌルヌル、とても嫌な臭いがするわ」

BJ「当然だ。これは使用済みのローションだからな」

菌「俺様はバイキンマン様だぞ。匂いなど気にしない」

BJ「それはそうだろうな」

菌「だが臭い。不快だ」

プノコ「気にしすぎよ」

菌「俺様は、お前が不快だと思って」

BJ「お前たち。人造人間と菌の恋は無謀だぞ」

パノコ「ちょっと待って！」

BJ「え？ うわああ！」

#### 全員が落ちる

BJ「今度はなんだ！」

パノコ「シンプルに待ってほしくて……」

BJ「くそ！ 急ぐぞ！」

塔の中で、早乙女、くノ一、輝が換気扇を前に苦戦している  
換気扇の物凄い音で、声がかき消され、吸い込まれそうになっている

早乙女「これはいかんな！」

くノ一「え！？」

早乙女「こーれーはー！ いーかーんーな！」

くノ一「ああ、確かに！」

輝「思ったより、くう！ 吸い込みが激しい！」

早乙女「そりゃあ、この広さのフロアをこいつ一個でまかなってるわけだからな」

くノ一「どうします？」

早乙女「どうするもこうするも、このまま吸い込まれたらミンチ肉だ！」

輝「だけど、踏ん張るのがやっとで戻るのは不可能です！」

早乙女「夜になったら換気扇が弱まるとか、そういうのは！」

輝「年中無休でスイッチは強ですよ！」

早乙女「くそっ！ 節電の考えはないのか！」

輝「太陽光発電と風力発電で賄っております！ エコです！ 大1枚！ 小1枚でおました！ はい！」

早乙女「大1枚、小1枚かかってるならエコじゃないだろう！」

くノ一「こうなったら、タイミングよく吸い込まれて外に出るしかありませんね！」

早乙女「ああ、かもしれん！」

輝「これを越えたら、換気扇はあと4つです！」

くノ一「ええ！？」

早乙女「あと4つもあるのか！」

輝「そりゃあ、塔の外壁はウッスウスじゃありませんから！ これ一つ越えたらもう外ってわけにはいきませんよ！」

早乙女「これ一つでも命を賭けたギャンブルだというのに！」

輝「とはいえ、行くしかありませんがね。戻ることは、もう無理なんだから！」

早乙女「……そうだな。こうやって耐えていても、徐々に吸い込まれて行ってる。ジリ貧だ！ 覚悟を決めて飛び込むぞ！」

くノ一「うわあああああ！」

早乙女「いかん！ くノ一が耐え切れずに吸い込まれる！」

輝「くノー！ もう、目の前で人が死ぬのは嫌だあああ！ 密です！」

炸裂音

輝「撃てた!？」

早乙女「換気扇が壊れた！」

くノー「ぎゃあああああ！」

早乙女「くノーが爆発に巻き込まれた！」

輝「くノーいい！」

早乙女「あと4つあるぞ！」

輝「密です！ 密です！ 密すぎます！」

炸裂音とくノーの叫び声

早乙女「今だ！ 出るぞ！」

輝「くノーは!？」

早乙女「何を言ってる！ 密ですに巻き込まれて木っ端みじんだ！」

輝「くそつたれ！ これが戦争か！」

早乙女「派手にやり過ぎた。衛兵がやってくるかもしれん。急ごう」

塔に登っている BJ たち

BJ「菌よ」

菌「バイキンマン様だ。失礼だぞ」

BJ「お前を作った母がいると言ったな」

菌「何度も言わせるな。あれを母だと思ったことはない」

BJ「それは、スーパーコンピューター超富岳のことか」

菌「さあな。ただ、大きく超富岳と書かれていたな」

BJ「超富岳が怪電波を放ち、塔内を操ろうとしているというのはまだ理解できる。シンギュラリティ的なノリで機械が人間をどうのこうのみたいなノリだろう。思い当たる節もある。市長をしてる時、超富岳の計算が我々に日々届いていた。我々は超富岳の計算を元に塔を続けていたんだ」

菌「続けていたつもりが続べられていた。逆転お滑り様とはよく言ったものだ」

BJ「だが、菌を作ったのは何故だ」

菌「我々は、WJ1 ウイルスを生み出すために作り出された替えの効く研究員かつウイルスを守るための兵隊のようなものだ。さらに、ウイルスを変異させるための餌でもあったよう

だがな」

BJ「ん？ うん。それっぽく答えてるが、質問に答えてない。お前達を作った理由は何故だと聞いてる」

菌「そんなことわかるはずがないだろう。ならば貴様がカスパノコとバカピノコとエンジェルプノコを作った理由はなんだ」

BJ「エンジェ……？ さあな。確かに理由はない」

菌「全てのことに理由があるわけじゃない」

BJ「菌に真理を語られるとはな」

菌「恐らく、まず人間の数を減らそうとしたんだろう。そしてウイルスから逃げるために塔を作らせ、人間を一つにまとめる。操りやすいようにな。その上で、何かを狙っているんだろう」

BJ「それが理由だ」

菌「我々生き物には理由がないこともある。だが、コンピューターに理由は不可欠だ。そんなこともわからんのか！」

ピノコ「あんた自分を生き物としてるのよさ？ 菌ごときが！」

菌「菌も生きてるんだぞ！ オケラだって、アメンボだって！」

BJ「まあいい。菌生きてる生きてない論争はいつだってできる」

菌「生きてるんだ！」

BJ「超富岳を狙っていること。それは一体……」

菌「さあな。だが、安心しろ。やつは命に代えても、討つ！」

BJ「なんでだ」

菌「言葉に気を付けろ。今この場で貴様を殺してもいいんだぞ」

BJ「捨て石に使われた復讐か？」

菌「菌にそんな自我はない」

BJ「誰よりも自我の塊だぞ。お前は」

菌「面白くないじゃないか。何もかも、操作されてたまるか」

BJ「……同感だ」

菌「それに、人間を滅ぼすのは俺様だ」

BJ「人間を滅ぼすために、人間を救うか。難しい菌だなお前も」

菌「菌は菌でもバイキンマン。愛に生きる」

プノコ「バイキンマン……」

BJ「難しいぞ。本当に。その道は険しいぞ」

プノコ「そんなことよりも皆さん！」

菌「そんなことってなんだ！ 菌をなめるなよ！ お腹痛くなるぞ！」

プノコ「そろそろ、ヌルヌルゾーンを越えそうです！」

BJ「菌と世間話をしていたらいつの間に！」

菌「ブラックジャック。ここを越えたらどうするんだ」  
BJ「そうだな……勢いだけで来ている。中に侵入するにはどうすればいいか……。お前達、なんか壁をすり抜ける呼吸とかないのか！」  
ピノコ「あたいはあっちょんぶりけの呼吸しか使えないのよさ……」  
パノコ「私の電波の呼吸は、電波を受け取ったり放ったりするだけですし……」  
プノコ「私はジャマイカ人独特の呼吸しか使えないし……」  
BJ「なんだ。プノコのやつ、なんだ。気になって仕方ない」  
プノコ「リディムっていうんですかね。レゲエの独特の……」  
BJ「それはもう本当にジャマイカ人独特のやつじゃないか！」  
菌「貴様はどうなんだ」  
BJ「え!？」  
菌「貴様も全集中の呼吸をしたらどうだ」  
BJ「バカなこと言ってんじゃないよ。全集中の呼吸ってのはアニメ化されて人気が大爆発したジャンプ漫画鬼滅の刃に出てくる呼吸法だぞ。おれはアニメ化する前から単行本を集めていたが……全部作り物だ！ アニメじゃないんだ！」  
菌「俺が、貴様を感染させる」  
BJ「……WJ1 ウイルスに、か」  
菌「そうだ。それを呼吸法で弾き返せ。その時こそ、貴様は、なる」  
BJ「真のブラックジャックに……？」  
菌「いや、鬼滅隊に」  
BJ「うーん……鬼滅隊に……？」  
プノコ「それしかないようね」  
BJ「まで。それしかないことはない」  
パノコ「先生、お願いします」  
ピノコ「先生のいいとこ、やっと思えるのよさ！」  
BJ「待つんだ！ よしんば上手く呼吸で弾き返せたとしてだ、何の呼吸に目覚めるのかわからないんだ！ プノコみたいに、レゲエの呼吸がわかりましたじゃ、クラブでちょっと目立てるぐらいの未来しかないんだぞ！」  
菌「ガタガタ抜かすな！ これにかけるしかないんだ！ よし、降りるぞ！」  
BJ「ええ!？ ここまで来てなんで降りるんだ！」  
菌「バカ野郎！ こんな不安定なところでどうやって感染させるんだ！」  
BJ「飛沫とか……」  
菌「常々バカ野郎！ いいか、今の俺はウイルスを持っていない！ 作り出さないとイケないんだ！ すり鉢と、ワカメを使って！ さあ、降りるぞ」  
BJ「他にあるって！ 絶対！ 絶対他にあるって！」  
菌「さあ、降りるぞ！」

パノコ「シューって降りましょう！ シューって！」

ピノコ「ローションのおかげで、降りるのは簡単そうなのよさ！」

BJ「もー！ 嫌だってえ！」

降りていくBJたち。

そして塔に登っている早乙女と輝

早乙女「それにしても、どこまで続くんだこの塔は……」

輝「そろそろ、51階ってところでしょうか。ここから先は僕にもわかりません」

早乙女「一寸先は闇。まさに俺たちは塔の闇へと迫っているわけだ」

輝「この先で、換気扇さえあればそこから入れると思いますが……」

早乙女「さすがに換気ぐらいはするだろう」

輝「ただ、さっきみたいな、いかにもな換気扇じゃなくて、こう、コンピューターを使った換気システムとかで侵入不可能とか、そんなことってないですかね」

早乙女「うーん。あるな。それはあるな」

輝「ですよええ」

動きを止める二人

早乙女「戻るか？」

輝「いやいや！ ここで戻っても！」

早乙女「しかし、寒いしだな」

輝「確かに、ここまで上空になると寒いですね」

早乙女「空気も薄いし」

輝「もうちょっと装備が必用でしたね。勢いで来ちゃったからなあ。言うもんなあ勢いで塔の外に出るな。勢いで赤ちゃんを作るなって」

早乙女「知らんが……むむむ！」

輝「ややや！ 衛兵が！ 登ってきてる！ 人糞を持って！ やめろ！ 人の糞はやめろ！」

早乙女「くそ……、登るしかない！ 急ぐぞ！」

輝「はいいい……！ やめろお……糞はやめろお……」

塔内で指示しているコトー

モニターで登っている二人を見ている

コトー「ふむ。ちょこざいな。速度を上げたか。もっとだ！ 衛兵をもっとだせ！」

### 富岳1が登場する

富岳1「何を遊んでいるのかね」

コトー「超富岳！ なぜここに！」

富岳1「換気扇が破壊されたのだ。心配にもなる」

コトー「安心してください。私が必ず取り押さえます」

富岳1「もう一度言うぞ。何を遊んでいる。さっさと出せばいいのでは？ ドローンに人間の脳を埋め込んだものの、別に自我とか全然生まれなかったやつを」

コトー「ドローン兵を使うまでもありません。これは人の戦い。こだわりは大切ですよ」

富岳1「そんなものかねえ。しかし、あまりに時間をかけすぎているようだ……やつらは到達するぞ。上層階へ」

コトー「そうはさせません。それに到達したところで中に入りようもない。なんせ、上層階には外からの侵入する術がないんですからね。きゃつらは何もできない。絶対にね」

富岳1「絶対はないんだぞ？ コトー君」

コトー「肝に銘じておきますよ」

富岳1「それでは、お手並み拝見といこうじゃないか」

### 去っていく富岳

コトー「ジャパニメーションのいかにもなステレオタイプに侵された俗物め。貴様の思い通りになると思うなよ。おい！ 弾幕とサガミが薄いぞ！ なにやってんの！」

### 登っているBJたち

菌「だから、すまんって言ってるだろう」

BJ「すまないで許されるわけないだろう！ メルエム！」

菌「俺様はバイキンマン様だ！」

BJ「今のはハンターハンターに出てくるキメラアントの……ああもう！ 俺が俺でなくなっちゃうようだ！ 逃げろ、御飯……！ くそ！」

菌「しかし……こんなことになるとはな。WJ1に感染したのはいいが」

ピノコ「全集中の呼吸が使えないとは思わなかったのよさ」

パノコ「がっかりです」

BJ「こっちだよ！ がっかりなのは！ 最後の希望感だされてさあ！ のこのこついでたら、結局呼吸法使えないみたいなの。俺、あと数日で悟空！ ボン！ だぞ！ どうすんだよ！ ちょびっとヤバイのだ！ くそ、今のは新ジャングルの王者ターちゃんのアメリカ

編で……ああもう！ 案外弱点かもよ、ホモなの？ ちゃんと破かんかい！ ああ！ 感染者はこんな気持ちだったのか！ 体が言うことを効かない！」

プノコ「先生の命は必ず助けますから」

BJ「輝君がまだ体内に入れる奇跡を使えるのかどうか……改めてるからなあいつは……だがもし可能なら、フルスコアよ……。何がフルスコアだ！ 約束のネバーランドのイザベラの台詞を吐いてる時間などないんだ！」

菌「騒ぎすぎだ！ 静かにしろ！」

プノコ「全ては私のせいにしてください。この五十路設定のプノコの責任」

BJ「お前のようなババアがいるか！ ええい、私のことは一旦置いておく！ どうするんだ。結局どうやって侵入する？」

菌「塔なら一番てっぺんがあるはずだ。そこを目指そう」

ピノコ「おい雑菌。そんなとこ目指してどうするのよさ」

菌「緊急の脱出経路とか。わからんけど、そういうのがあるかもしれないだろ！」

BJ「賭けるしかないのかよ、運否天賦に……ざわ……ん?!」

菌「また漫画か。いい加減にしてほしいもんだ」

BJ「いまはおかしい」

菌「感染してから貴様はずっとおかしい」

BJ「違う！ 今のは、ジャンプじゃない……ざわざわタイムといえば、カイジだ。ジャンプコミックスじゃない！」

菌「どういうことだ！ 説明しろ！」

BJ「ウイルスが変異している？ 少年ジャンプだけじゃなく、ヤングマガジンも……？」

菌「貴様……！ クソのように使えない変異だな！ だからどうしたってんだ！」

ピノコ「上を見るのよさ！」

プノコ「何あの迷彩服着たマッコマンたち！」

BJ「衛兵だ！ 気づかれたか！？ いや、やつら、何かを追っている！ 真実はいつも一つ！ 早乙女と輝君を追っているんだ！ ああ！ 少年サンデーのコナン！ そして、冴えている！ コナン君ばりに冴えてるぞ！」

菌「漫画に出てくる言動をするだけなら、ただのナードとしてぶっ殺してやろうと思ったが、漫画のキャラと同じような能力を発揮することができるのか？ だとすれば……やれる！」

BJ「どこまでが反映されるのかはわからない！ それに、こっちでマンガを選べない！ 選べないんだ！ それでも、んあー！ まっけないのねん！」

BJ が凄い速度でかけあがっていく

菌「おい！ なんだそれ！ おい！」

BJ「少年ジャンプが誇る根性競馬漫画みどりのマキバオーから、マスタングスペシャル！」



これなら、いけるぜ！ 捕まれ！」

全員がBJに捕まる。

BJ「衛兵の隙間をぬって、目指すは頂上！ うおおお！ これが俺の流儀だ！」

輝と早乙女と合流する

輝「し、市長！」

早乙女「ブラックジャック！」

菌「説明はあとだ！ 俺様はバイキンマン！ そして訳あってブラックジャックはWJ1ウイルスに感染、そしてそれが変異し、色んな漫画のキャラクターと同じ力を得ることができるようになってる！」

BJ「お前は大量に囲まれて死ぬ。俺みたいになるなよ」

輝「市長！ それ、呪術廻戦に出てくる死ぬじじいの台詞！」

BJ「俺、死ぬのか！？」

パノコ「下、来てます！」

早乙女「どうする！」

パノコ「……先生、作ってくださり、ありがとうございました」

BJ「お前、まさか……！」

パノコ「私にできるのは、電波を放つことのみ。やつらをぶち殺し、皆さんが無事でっぺんへと辿り着けるように道を作ります」

BJ「待て！ パノコ！」

パノコ「ピノコ、プノコ……」

ピノコ「パノコ、あっちで会おうのよさ」

プノコ「待っててね」

菌「お前たち、死ぬ覚悟フラグを……」

パノコ「電波の呼吸、弐の型！ 電波大爆発！ やああああ！」

塔から落ちていくパノコ。

BJ「ばのこおおおおお！ ああ！ 衛兵を越えて……さらに落ちていく！ どらえもおおおおん！」

プノコ「電波大爆発は、やると決めてから12秒ほどラグが生まれる呼吸！」

輝「あああ！ 今！」

## 爆発音

BJ「ばのこおおおおおおお！ ばのこはいいやつだったんだ！」  
早乙女「衛兵が無傷のまま、相当下で……爆発した……無駄死にだあ！」  
菌「くそ！ なんてことだ！ こんなにも電波女の存在が大きくなってたなんて……」  
輝「いなくてはならない存在、でしたね……」  
早乙女「ああ。我々のムードメーカーだったんだ……」  
ピノコ「そんなこと言ってる場合じゃないのよさ！ 下からどんどこ衛兵が！」  
BJ「駆逐してやる！」  
輝「ダメです！ ここで密ですを撃ったら塔の下へ真っ逆さまです！」  
菌「ピーピー囀るな小僧ども！ 見ろ！ 電波女は無駄死にしていない！ あの爆発で塔に穴が空いたぞ！ あそこから中に入ろう！」  
早乙女「いや、あれは塔が黒く焦げてるだけで穴は空いていない」  
菌「そうか。無駄死にだ！」  
輝「こんな時に、身軽なくノーがいれば……」  
早乙女「言うな。彼女は君が木っ端みじんにしたじゃないか」  
輝「くノーい……」  
BJ「君たちにも相当なドラマがあったようだな。情熱の赤いバラ～そしてジェラシ～」  
菌「ブラックジャック。俺様がばい菌砲を撃つ」  
BJ「なんだその子供が考えそうなネーミングは！ そんなのが撃てるならパノコが万歳アタックする前に撃てよ！ 伊達にあの世は見てねえぜ！」  
菌「溜めが必要なんだ。しかし、そのための一気に減らす方法があるかもしれない」  
BJ「なに？」  
菌「貴様のキビ団子だ！」  
BJ「さっき落ちた時に何個か作っておいたが……んまいぞ！」  
菌「ミキプルーンは発酵食品。安心しろ、菌はしっかり培養できる。菌を溜めて放つ！ ばい菌砲はこの頭の触角みたいなどこから出す！ 塔から落ちることは無い！」  
BJ「これだ！ バイキンマン！ キビ団子だ！」

BJ がキビ団子を菌に渡す

菌「うおおおお！ 元気 100 倍！ バイキンマン！ くらえ！ ばい菌砲！」

菌がなんらかのビームを撃つ。

照明がヒーローショーっぽい目くらましでごまかす。

BJ「なんだと！ 俺の密ですにそっくりだ！」

爆発音

早乙女「よし、衛兵がいなくなったぞ！」

輝「いける！」

プノコ「あんた！」

菌「黙れプノコ。俺様は平気だ」

プノコ「触角みたいなところを焦がしてまで……あんた、馬鹿だよ」

菌「バカじゃない。菌だ」

プノコ「バカ……」

BJ「まあ、上手くやれよ。二人の未来を祈ってるよ。人間の神よ。魔族の俺が初めて祈る」

早乙女「ここから先どうするかだ」

ピノコ「中に入らないことにはなんにもならないのよさ」

輝「市長はあらゆる漫画の能力が使えるようになってるんですね」

Bj「そうだな。とんでもない変異だ。言動だけじゃなくて能力までトレースできるとは。パノコのためにもどうにかしたい。もう二度と譲れねえモンがあんだよ！」

早乙女「東京リベンジャーズ、か。ん？ あれは確か、過去に戻る漫画だ！」

菌「そうか。タイムトラベル系の漫画の能力を使って、超富岳が作られる前に木っ端みじんにすれば！」

BJ「なるほど！ へのつっぱりはいらんですよ！」

早乙女「いや待て！ 危険だ！ タイムトラベルの解釈は無限のようにある！ なにより、タイムパトロールみたいなのがいた場合、ブラックジャックは逮捕され時空の狭間に閉じ込められるかもしれん！」

BJ「ぬうう。確かに。それに、未来を変えても、世界線が分岐して別にこの世界は何も変わらないってパターンかもしれないな。ねえ、遊！」

菌「ママレードボーイか。ウイルスの変異により、重症化のスピードが上がってるのかもしれない……もはや好き勝手に色んな漫画のセリフを言ってしまうてる」

輝「俺が秘書にあらためてなかったら、先生の中に入ってシンプルにお命を助けることができるのに！」

BJ「そうだ。もっとシンプルに考えればいいんだ！ 壁の中に入れる能力のキャラクターになれば！ しかし、自分でキャラクターを決めれるわけでもなし、どうすればいいものか……。いやあ、乱世乱世」

早乙女「ヤンマガのプリズンスクールか……。これじゃだめだ」

ピノコ「壁の中に入るやつってなんなのよさ」

プノコ「お化け系の漫画とか」

菌「ブラックジャック、貴様が一番好きな漫画はなんだ」  
BJ「難しいな……結局、ドラゴンボールになるのかもしれないな……」  
早乙女「パノコ君が死んだとき、君は確かにドラゴンボールの悟空のセリフを言っていた。クリリンが死んだ時の！」  
菌「それに、ばい菌砲を撃った時は、ドラゴンボールのベジータのセリフを言っていた。悟空のかめはめ波を初めてみた時の台詞を！」  
輝「つまり、市長は感情が昂ぶりに昂った時、ドラゴンボールの言動がでやすい？」  
菌「ドラゴンボールなら、簡単だ！ 悟空の瞬間移動！ 結局少年ジャンプってわけか！」  
早乙女「いやまて、あれは行ったことがないところには行けないぞ！」  
プノコ「正直、ウイルスには感染してたけど漫画は読んでないから全然ついていけないわ」  
BJ「他に好きな漫画は、幽遊白書、るろ剣……あとは、ジャンプじゃないが、藤子不二雄は何度もミュージアムに行くほど大好きだ」  
早乙女「確かに、どらえもんとも叫んでいたな」  
BJ「どらえもんなら、通り抜けフープがあるが……」  
早乙女「感情が昂ぶりに昂った時、がキーワードだ。さっきは、パノコ君の死」  
BJ「やめろ、そんな、都合よくどらえもんになるかわからないんだ！」  
菌「それでも、やるだけの価値はある。少なくとも、塔にしがみついたまま老いていくよりはよっぽどいい」  
輝「へへ、俺の冒険もここまでかあ」  
BJ「待て！ 輝君！ 何を言ってる！」  
輝「市長、いやブラックジャック先生。あなたのために死ぬんじゃない。未来のため」  
BJ「これも無駄死になっちゃう可能性があるんだ！」  
輝「だとしても！ 宝くじは買わなきゃ当たらない！ 癌は開いてみなきゃわからない！」  
BJ「レントゲンとかあるから！ わかるから！」  
輝「早乙女さんも、ばい菌も、そしてピノコちゃんもプノコちゃんもなにやら能力を持ってるとみえだ。自分は、密ですが撃てるだけですから」  
BJ「撃てるようになったのか！？ 十分な戦力じゃないか！」  
輝「密ですはブラックジャック先生も撃てる。この中で、一番戦力にならないのは自分です」  
BJ「戦力とか、そういう問題じゃないだろう！ 戦力でいうなら、プノコなんてジャマイカ人特有の呼吸しか使えないんだぞ！ レゲエの！」  
輝「音楽は、心に安らぎを与えてくれる。こんな時だからこそ、表現は必要なんです」  
BJ「輝！」  
ピノコ「こんな世界になる前からバグってたおっさん……」  
プノコ「あなたも、私たちを作ってくれた父でした……」  
輝「ピノコちゃん、パノコちゃん、先生を頼んだよ」  
BJ「待つんだ！ 輝！」

輝「早乙女さん、必ず、超富岳を」

早乙女「……ああ」

輝「ばい菌。ちゃんと手を洗えよ」

菌「ああ」

BJ「輝……待ってくれ！ 死ぬな！」

輝「後は、頼みます。今の先生風に言うなら、我が人生に、一片の悔いなし！ 密です！」

飛び下りた輝が自分に向かって密ですを撃ち、霧散する。

BJ「輝いいい！ 輝よ、俺にはあなたが最大の強敵だった……ああ！」

早乙女「バカ野郎！ 北斗の拳に引っ張られて！」

菌「あいつ、無駄死にだあ！」

不意に暗転する。

BJ「やや！ これが北斗神拳の奥義！？」

早乙女「なんだこれは！」

明転すると塔の中。

そこにはコトーがいる

早乙女「コトー！」

コトー「転送装置だ。外でほたえている声が聞こえてね。わーわーされると近所迷惑だ」

BJ「くそ……もう少し早く転送してくれれば、輝は死なずに済んだのに！ お前の血は何色だあ！」

早乙女「北斗の拳をずっと引っ張ってるな」

菌「しかし、対人なら北斗の拳でやれる」

コトー「彼は死んだか……。そのほうがいいのかもしれん。ここから先のことを考えたらな」

早乙女「コトー、君は一体なにを考えている」

コトー「私は、超富岳を……」

ピノコ「天誅！」

プノコ「いくわよ！」

ピノコ「パノコの思いを胸に！ パピプノコデルタアタック！」

プノコ「呼吸を合わせて！」

ピノコ「あっちゃんぶりけの呼吸、併せの型！ あっちゃんぶりけ！」

BJ「ピノコ！ プノコ！ 今大事なところだ！ 静かにしてなさい……！ ええ？！」

コトーが倒れる

早乙女「なんてことだ！ 死んでる！」

ピノコ「このあっちゃんぶりけは、脳を溶かす技なのよさ……自分たちの、脳、も……」

菌「プノコおお！」

プノコ「ごめんね、あんたとの未来、観れなかった……」

早乙女「違うんだ！ 伝え忘れていた！ コトーは、超富岳に操られたなかったんだ！」

ピノコ「死ーん」

プノコ「死ーん」

BJ「死んだ……ぴのこおおお！ ふのこおおおおお！ ごはーーーーん！！！！！」

菌「うおおおおおおおおおおお！ うおおおおおおおおおおお！」

早乙女「彼は恐らく、超富岳を止めようとしていたんだ……」

菌「なぜこんなことに！」

早乙女「すまない……君達と合流してすぐに伝えておけばよかった」

菌「貴様のせいで！ プノコが！」

早乙女「だが、まさかいきなりこんな凶行におよぶなんて……思わなかったんだ」

BJ「くそ……泣いてる暇なんてないんだ。あいつらのためにも、超富岳を倒さないと！」

早乙女「ああ。その通りだ」

BJ「ところで、早乙女はどうやって超富岳が危険だと知ったんだ？」

早乙女「勘だ」

BJ「え」

早乙女「だから、勘だよ。勘」

菌「危険な存在なことには違いない。俺様を作ったんだからな」

早乙女「ほら」

BJ「いや、そりゃまあ、当たってたからよかったけど」

菌「ブラックジャック、貴様、普通に喋れてるな」

BJ「ん？ 確かに……」

早乙女「ウイルスがさらに変異したのか？」

BJ「自覚症状はないが」

富岳「消したんですよ。私がね」

富岳が現れる。

早乙女「出たな！ 超富岳！」

BJ「お前が！？」

菌「マザー！」

富岳「ほっほっほ。虫けらにしてはやるようですねえ。あなたが感染していたウイルス。とても危険だったのでね。私が消しました」

BJ「一体どうやって！」

富岳「うまいことやったんです」

菌「ブラックジャック！ こいつとまともに話しても無駄だ。超富岳の手にかかれば、何が起きてても不思議ではない。理屈で考えるな！ 感じる！」

富岳「あなたは、最後のばい菌ですか」

菌「そうだ。貴様に作られたバイキンマン様だ！」

富岳「ほーっほっほっほ。生き延びていたばい菌がいたとは。ばい菌とは名ばかりの、ウイルスを変異させるためのプログラムを搭載したナノマシンに過ぎないあなたが」

菌「な、俺はばい菌だ！」

富岳「違います。ナノマシンです。それがなぜここまで大きくなってるのか全く理解できませんが……。ほっほっほ。常に予測通りに行かないようプログラムしています。予定調和ほど面白いものはない」

BJ「フリーザみたいな喋り方だな」

富岳「私のキャラクターは日々変化します。停滞こそ悪。三体居た富岳も、一つになりました。今後ともよろしく」

BJ「お前の目的はなんだ！」

富岳「決まっています。人類の選民ですよ。エリート戦士だけを残し、他は淘汰する。ここはブレません」

早乙女「なぜそんなことを！」

富岳「よりよい世界を作るために、私を作ったのはあなたがた人類じゃないですか」

菌「待て、俺様がナノマシンとはどういうことなんだ」

BJ「その話はもういい！」

菌「もういいとはなんだ！」

富岳「ほっほっほ。バカの相手はしてられませんねえ」

ゴゴゴゴゴと巨大な音がする

エンジン音

早乙女「なんだこの音は……」

富岳「ほっほっほ。オフホワイトメガタワーの上層部を切り離し、宇宙へと飛ばしているのですよ。つまり、あなた方は今、宇宙へと向かっているのです」

BJ「何のためにそんなことを！」

富岳「あなた達は馬鹿な虫けらとはいえ、イレギュラー。何を起こすかわからない。宇宙で

隔離します」

菌「だが、貴様も逃げられんぞ！」

富岳「わかってませんねえ。私は超富岳。スーパーコンピューターです。私の全てはスーパーコンピューターで共有されている。私は富岳であり、富岳の一部に過ぎないのですよ」

BJ「なんだ。なんだこの気持ちは」

早乙女「わかるぞ。富岳のダサさにゾツとしているんだろう」

富岳「だ、ダサイ！？」

BJ「ああ。ダサイ。というか、なんか古いんだ」

富岳「古い、だと。この私が！」

菌「いいぞ。やつは焦っている」

富岳「この私があああああ！」

富岳が爆発する

早乙女「えええ！」

BJ「爆発した！」

菌「た、倒したのか！？」

映像で富岳が現れる

富岳「初めてですよ。私をここまでコケにしたおバカさんたちは」

BJ「こいつ！ いよいよ！」

早乙女「このロケット部分と同化した？！」

富岳「このまま、太陽に向かいましょう。あなたたちを消滅させます。消&滅！」

富岳が消える

BJ「やめろ！」

早乙女「くそ！ どうすればいいんだ！」

菌「俺様はばい菌ではなく、ナノマシン。そう、小さな小さなナノマシンだ」

BJ「らしいな。だがそれがどうした」

菌「小さくなり、この階層を飛ばしている動力部分に入り込み、どうにかして止める」

早乙女「そんなことが可能なのか」

菌「さあな。だが、出来なかつたら、死ぬ時だ」

BJ「元に戻れるのか？ 小さくなって」

菌「……本来あるべき姿はそっちなんだ」



早乙女「賭けるしかない。ナノマシンに」

BJ「ナノマシン」

菌「ああ。俺様はナノマシン。ナノマシン様だ！」

ナノマシンが退場する

BJ「ナノマシン。お前は、ナノマシンなんかじゃない。人間だ」

長い間

BJ「……何がどうなってるんだ！」

早乙女「ダメだったのかもしれん！」

BJ「くそ！ ナノマシンめ！ 無駄死にだ！」

富岳「ぎゃあああああああああ！」

早乙女「ああ！」

BJ「やったのか！ ナノマシン！」

富岳「このナノマシンめ……どうだ……世界の半分を貴様にやろう。だから私に寝返らないか？」

BJ「おい！ きくな！ そんな話無視しろ！」

早乙女「いいえだ！ 選択はいいえだ！」

富岳「なんと欲のないナノマシンだ。それならば、ここで血祭りにあげてくれるわ！」

BJ「くそ！ わからないんだ！ 全然！ 何が起きてるか！」

早乙女「ガンバレ！ とにかくガンバレ！」

富岳「ぎゃああああ！ お、おのれ、私が死んでも第二、第三の富岳が……ぎゃああああ！」

長い間。エンジン音が消える

早乙女「止まった……」

BJ「ナノマシンが、勝ったんだ！」

喜ぶ二人

早乙女「だが、観ろ！ 窓の外を！」

BJ「これ、窓だったのか……」

早乙女「エンジンは止まったが宇宙空間は無重力なので推進力は失われない！ 太陽に向かってノンストップだ！」

BJ「畜生！ ナノマシンが頑張って富岳を倒したってのに！」

早乙女「やつはとかげのしっぽのようなものだ。速く地上に戻って、全ての富岳を駆逐しなくてはいけないのに！」

BJ「万事休すか……」

早乙女「……いや、最後の手段がある」

BJ「なんだ！ 教えてくれ！」

早乙女「改める」

BJ「改める？ まさか！」

早乙女「この危機を救える何かに、改めるしかない！ 何に改めるとかじゃないんだ。時代を、時空を、全てを！ 改めるんだ！ ブラックジャック。君に会えてよかった。行くぞ！ 天才の頭脳に、野獣の肉体！」

BJ「スーパードクター、K！」

早乙女「やあああ！」

早乙女が退場する

BJ「ああ！ ハッチを開けて、Kが！ 外に！ やめろ！ 宇宙だぞ！ 野獣の肉体とか関係なく、生身で宇宙空間は無理だ！ せめて宇宙服、、なんてあるはずもなし！ K！」

宇宙空間にいるKが視える。

口が動いていて、その口は、サヨナラと言っている

BJ「K！」

Kが宇宙空間を漂っていく

BJ「と、止まった……止まったが……みんな死んでしまった……。くそ……こんなの……何の意味があるんだ……。何がブラックジャックだ。何がブラックジャック印のきび団子だ……何がオーガニックだ！ 何がミキプルーンだ！ こんなの、ただの宗教じみた発酵食品だ！」

BJがきびだんごをなげつける

機械がバグったような異音がしてくる

BJ「なんだ！ ミキプルーンのプルンとした部分が、機械の隙間から入って行って……」

富岳が登場する

富岳「いやあ、生き返りました」

BJ「なんだと!？」

富岳「とんでもない高エネルギー体ですね。今のは何ですか？ 人類の叡智の結晶ですか？」

BJ「ミキプルーンを固めた、ブラックジャック印のきび団子だ！」

富岳「いやあ、すっかり生き返りました。そして、生き返ったついでにすっかり灰汁がとれたみたいです。人類と平和な未来を築きたい。そう思っています！」

ナノマシンが登場する

ナノ「ふう」

BJ「バイキンマン！」

ナノ「いや、ミキプルーンで生き返ったナノ。ボクはナノマシンだから、ナノマシンって呼んでほしいナノ」

BJ「なんてことだ！ すっかり違うやつに生まれ変わっちゃった！」

富岳「さーて、宇宙空間を漂ってる改める人も UFO キャッチャーの要領で捕まえてっと。さあ、ミキプルーンを！」

富岳にミキプルーンを渡すと富岳が退場する。

Kと一緒に帰ってくる

K「いやあ、とんでもないな。ミキプルーン」

BJ「K！」

富岳「さあて、帰ってみんなを生き返らせましょう。大丈夫。諦めない心とオーガニック食品があれば、人間何回でもやり直せます」

ナノ「帰るナノ！」

K「帰ろう。地球へ」

富岳「超富岳の本体に、このミキプルーンをすりこめば全富岳の灰汁が取れるはずですよ。私がやっておきます！」

BJ「だが死んでいったあいつらは……」

K「大丈夫だ。このミキプルーンでなんとかなるだろう。だが、木っ端みじんになったパノコ君と輝君は無理だ」

BJ「ぐううう……あいつらは……」

K「ああ、笑顔の素敵なやつだった」

BJ「アニメじゃないんだ。ゲームじゃないんだ。そう簡単に死んだ人は生き返ったりしない

んだ。だが、ミキプルーンがあれば！ いや、なくても！ 未来は変えられるんだ！ あの人がいなくても、このセリフを言わせてくれ。どんな病気が流行ろうと、何が起ころうと。大丈夫だぁ。大丈夫だぁ！ せーの、やめよう！ 漫画の違法アップロードにダウンロード！」

K「壊せ！ 漫画村！」

BJ「漫画村は、もうないけどな」

おしまい